
彩雲国～最強という名の最凶な姉姫～

華南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩雲国へ最強という名の最凶な姉へ

【Nコード】

N1572Q

【作者名】

華南

【あらすじ】

紅秀丽には5つ年上の姉がいた。だが、ある日行方不明となった。

それから5年という月日が流れたある日、何の前触れもなく姉が帰ってきた。両手いっぱいのお土産と太陽のような笑顔と共に。

姉の願いはたったひとつだけ。

大好きで、大事で、大切な妹と在るために力をつけて帰ってきたのだった。

本編は秀麗が後宮へあがる前から物語は始まります。

その前にオリジナルストーリーが入ります。

オリジナルキャラ（多数）、原作キャラの人物設定が異なる場合もあります。

読む際、ご注意ください。

第零章 01 仲の良い姉妹（前書き）

原作沿いではありませんが、オリジナルキャラ・オリジナルストーリーを交えながら進めたいと思っています。

原作キャラの性格が若干^{かなり}変わっている場合もあります。

上記が許せない方は、読まずに別の物語へ進んでください。

第零章 01 仲の良い姉妹

紅家の姉妹と家人は夕暮れ時の人の多い時間帯を歩いていた。

両手には抱えきれない料理の材料。それも傷みはじめたものばかり。家人、静蘭は深くため息を吐きながらも前に行く二人を見つめていた。

姉は男装を好み、行き交う若い娘達の注目を集めている。若い娘たちだけではない。年配の女性から始まり、幼い女の子たちまで魅了している。中性的で整った顔、漆黒の長い髪、女性にしては長身の細い身体、性格も言動もどちらかといえば、男性的で余計に注目を浴びている。右手には秀麗と楽しそうに話している。秀麗も大好きな姉との買い物に心躍らせ、足取り軽く歩いていた。姉が笑えば、妹も笑う。相思相愛の姉妹に静蘭は、現状を忘れて思わず笑みを浮かべていた。

静蘭の両手に抱えきれない荷物の原因は漣にある。店主との値切り合い。そのおかげで、今日もどうにか材料を手に出ることが出来た。・・・のだが・・・やり方がヒドイ。日が暮れ、新鮮だった物は傷み始める。そうすると、スツと現れて黒い微笑を浮かべ一言「傷んでるね」とささやく。すると店主は顔に力を入れ、防衛に全力をかける。毎日、毎日、無料同然で値切られていては商売が成り立たない。だが、この人物に勝てたためしがない。それでも店主は守りを強化しながら、敵の攻撃に身構える。そんな一部始終を秀麗と静蘭は見つめるしかない。下手に口を挟めば勝敗は大きく変わる。それは本日の夕食にありつけないということ。

「へ・・・ハイ！らっしやい！」

「この辺りのもの…傷んでるよね…。こうなると売れないよね？な

んら、貰っても良いよ。そうしたら、本日の商売は終わり。お子さんとの楽しい夕食、奥さんとの楽しい団欒、一日の疲れが取れて、明日への活力が養える。良いことばかりじゃない。うちも助かるし、店も助かる、ね？それに決定！！」

黒い微笑と共に浮かぶは相手を氣遣った言葉の数々。だが、黒い微笑の裏にある嫌とも言えぬ迫力のある威圧に、店主は今日も泣く泣く負けてしまい愕然と肩を落とす。

その様子を見た秀麗は目を輝かせ姉の勇姿に頬を赤らめる。静蘭は秀麗の将来が少しだけ不安になるのだった。

「秀麗、これ持っててね。静蘭は残り全部。あとは・・・」

「まだかうの？」

「今日は少し暑かったでしょ？だから、まだ在るはず！なのよね・・・」

黒い笑顔の後に「ふふふ」と続きそうな黒い笑い声。その声は秀麗には届いていない。静蘭は任された荷物に苦笑しながらも器用に持っていく。

「せいらん、だいじょうぶ？」

器用に持った荷物に秀麗は振り返りながら聞くが、当の本人が返事を返す前に遮る返事が帰ってきた。

「秀麗は優しいのね。静蘭なら大丈夫よ。でもね、これくらいじゃ静蘭にとつて何でもないこと。まだ大丈夫よ。ね、静蘭。まだまだ大丈夫よね？」

少しも笑っていない視線を送くる姉に、静蘭は心で涙しながら笑顔で秀麗に微笑んで答えた。

「大丈夫ですよ」

姉は不敵の笑みを浮かべて秀麗に微笑んだ。それはあまりに見事な笑顔で、辺りに居た者すべてを魅了するのに時間はかからなかった。

新たな獲物を目指し三人は人の波に流されないように歩き始めた。買い物の終わりにいつも立ち寄る店に顔を出し、売れ残りや傷んだ

ものを貰って行く。けして買っていくのではない。そこは流石、紅家の経済状況を把握し、節約の鬼のように日ごろやりくいている強者。

総ての買い物が終わえ、家路に着こうとしていた頃、秀麗はあたりを見回していた。不思議に思った静蘭は声をかけると思いもよらない返事が返ってきた。

「ねえさまがないの」

秀麗の言葉に静蘭もあたりを探すが、一向に姿が見えない。

凄腕の漣れんの最大の欠点。

何も弱点が無いと思われがちの強者の漣の最大の弱点。家事、掃除、洗濯、家計のやりくり、高賃金の情報収集、金儲けの手腕など、様々なことを完璧に出来る連にも一つだけ欠点がある。それは極度の方向音痴。

一歩家を出ると、家に帰り着くことはない。静蘭が散々探し回ってやっと見つけた時には、日は落ち明け方に近いことが多い。どこをどう行っただのかは分からないが、意外な場所にいる場合が多いのだ。だから家から出る場合は、秀麗が静蘭のどちらかが一緒になければならぬのだ。

今日も秀麗と静蘭が帰ってくるまで、家で出来る高賃金の仕事をしていた。ただ買い物に行くだけでも迷ってしまい帰って来なくなる。迷っている漣を探し、買い物を済ませるのは静蘭の仕事となる。いつも探して帰ってきてくれたのに。

「さっきまでつないでいたのに」

秀麗は左手を見つめていた。大好きな姉の温もりを思い出すように見つめていた。目には今にも零れ溢れそうな涙が集まりつつあった。静蘭は一抹の不安が胸をよぎるが、頭を振り秀麗と視線を合わ

せ穏やかな笑みを浮かべ、安心さあせるように言葉をつむいだ。

「大丈夫ですよ、お嬢様。私がいつものように見つけてきます。すぐ家に帰りましょう。いつものように笑って帰ってきますから」

静蘭の言葉に秀麗はコクンと頷くと、軽い荷物を手に取り、静蘭と共に歩き出した。視線は辺りを見回していた。少しでも早く姉を探し出すため。静蘭も秀麗に気を配りながら、辺りを見回した。だが目的の人物の姿は見当たらない。

その日漣の姿を見つけ出すことはなかった。

姿を見たという情報もなかった。

秀麗は後悔していた。手を離さずに、ずっとつないでいればよかった、と。

静蘭も後悔していた。荷物を預け、すぐに探しに行けばよかった、と。

それから5年という月日が流れ、思わぬ再会を果たす。

第零章 01 仲の良い姉妹（後書き）

はじめまして華南と申します。

何となく買った小説にどっぷりハマり、妄想していた日々。
ついに小説まで・・・。

妄想をたっぷり含んでお送りします。

誤字、脱字、感想等お待ちしております。

02 あきらめない強さとあきらめきれない歪んだ情熱

気が付くとそこは見知らぬ部屋で見知らぬ人がいた。

身体を起こそうとするが痺れて動けない。

動けないのは、体で思考は動く。そのことに安堵の息を静かに吐いくと、心を落ち着かせた。今一番大事なのは、冷静でいること。そして状況を確かめること。

漣は記憶を辿り始めた。

先ほどまで秀麗たちと買い物を楽しんでいた。

静蘭をほど良くいじめて、まだまだ困らせるつもりだったし、まだまだ買占めようと思っていた。

会計も済み静蘭に全荷物を持たせ帰ろうとした時、視線を感じた。どこか不安で恐怖を覚える視線。

二人には何も言わずに、視線の先を探した。その瞬間は…覚えていない。

「見つけた」

低くもなく、高くもない声。

顔を確認するかのようにゆっくりと近付いてきた。視線が合う。その瞬間「逃げる事が出来ない」と本能が告げた。

この異様な空間で、「生ける人形」になるとは思わなかった。

一日の大半をこの部屋で過ごす男。

名前は知らないし、知りたくない。

会話のない日々を過ごしていた。

顔を合わせても言葉を交わすことはない。

最初の頃は、情報収集のためにいろいろ話しかけていたが、帰っ

てくる言葉はいつも同じで「さあ」や「わからない」といったものはかりだった。だが、仕草や所作は綺麗だったためつい見惚れたこともしばしばだった。

逃げ出そうと部屋を飛び出しても、いつの間には部屋に” 摩訶不思議空間（漣、命名）” に戻ってきていた。それでも逃げることをあきらめないでいた。寝台の上の板を外して屋根裏へ登ったり外へ出てみたり、男の目の前を通り過ぎて堂々と室の外へと出てみても行きつく場所はいつと同じ。この室だった。

心はあきらめないのに、体はこの生活に慣れ始めていた。

時折二胡を弾く。その音は懐かしい音で、思わず聞き入ってしまった。

母がよく弾いていた音に似ていたのだ。漣は二胡が弾けなかったというよりも、弾く気がなかった。二胡は弾くより聞く方が好きだったのだ。だから、漣は紅家の持ち芸である琵琶を弾く。教えてもらったのは、叔父二人と叔母だ。

まだ本家に居たころ教えてもらっていたのだ。

二胡は秀麗、琵琶は漣、笛は静蘭。よく三人で合奏していた。それに母が二胡を合わせ、父が話をしてくれた。

つい、昔のことまで思い出しては泣きそうになるのを我慢した。

「何を考えている」

「別に関係ないでしょ」

プイと顔を背けると男はただ見つめるだけだった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言の始まりになる。

日に何度か同じようなことを繰り返して一日が終わる。

その繰り返し。

違うのは、朝餉と昼餉と夕餉の内容と、用意される衣服と装飾品。

朝なのか、昼なのか、夜なのか、今はどの時間帯であるのか分からない。考えるだけ無駄のように思えて、7日で数えるのをやめた。今日もそうやって一日が終わるのだと思っていたが違った。

男はポツリ、ポツリ語りだした。

愛しいと思える女性がいた、と。

すべてを捧げてもいいと思っていた、と。

命が終わるその瞬間まで傍に居てくれるはずだった、と。

それがある時、奪われてしまった、と。

ずっと探していた、と。

そなたは女性に瓜二つだ、と。

最後の言葉に漣はここに居る理由が分かった。

瓜二つだということは…

「母様じゃないわ」

目の前の男は、母を愛していた。

「母様は父様を選んだのよ。あなたじゃなくて。だから私がここに在るのよ」

男は強気で生命力溢れる眼差しの漣を見つめた。

中性的で整った顔、漆黒の長い髪、黒曜石のような瞳、女性にシては長身の細い身体、艶やかで美麗な薔薇姫とは違い愛らしく思う。どこかあの男を思い出させるところもあるが、全体は彼女に瓜二つの娘。でも中身は違う。男勝りで、どんな状況にも屈しない強さをもっていた。何よりも”諦めない”強さを持っていた。

「それでも、そばに居てくれるのなら構わぬ」

「人形になれってこと？」

「人形はしゃべれぬ」

「一緒よ。自由になれないなら」

「自由であろっ」

「どこが」

「食事はある。衣服もある。身の安全もある」

男は当然のように言う。

漣が思う自由と男の言う自由の意味が違う。そのために同じ”自由”という言葉で意味が重なることはなかった。

「そなたの言う”自由”とは」

「私の意思で生きることよ」

男は興味が逸れたように立ち上がり颯爽と室を出て行った。漣は急いで後を追いかけ室を出たが、そこはいつものように何も無い真っ白い場所だった。ある一点を除いては。

「あれは…」

漣は思わず走り出すと、周りと違う一点まで近づいた。迂闊に近づいてはあの一室に戻されてしまう。だが、目の前の一点は違っていた。一点の先は周りと違う景色なのだ。漣は躊躇わず一点に手を入れたその瞬間周りの景色が変わった。

真っ白い景色がどこかの屋敷のような景色へと変わり、そこは人の気配がする場所だった。

「誰ですか？」

振り返ると少女が見つめていた。年は10歳前後で秀麗とあまり変わりがないようにみえた。少女の手にはお盆に茶器が一つ。どこかに運ぶ途中だったらしい。漣は急いで道をあげると、少女が居なくなる前に情報を仕入れるために声をかけようとしたが、少女は隠し持っていた短剣で突進してきた。

「えっ」

間拔けな声を出しながら漣はよけると、少女の後ろから新たな人影が出来ているのに気付いた。どこから出てきたのか、分からなかったが人影は増え続けた。

「まずっ」

悪いことはしていないのだが、突然現れた漣はどうみても不審者でしかない。

そう考えれば、答えはひとつ。

「逃げるしかない」
そう結論付けると漣は走り出した。

02 あきらめない強さとあきらめきれない歪んだ情熱（後書き）

少し訂正しました。

03 逃亡は計画的に

どこをどう走ったか覚えていない。

無我夢中で走り続けていた。

どれだけ走ったか分からない。

数刻だったかもしれない、一日だったかもしれない。

漣は疲れていた。攫われてから運動をしていない日々を過ごしていたのだ。無理もない。筋肉が衰え、ちよつと走っただけで息が上がつてしまっていた。

日ごろの鍛錬を怠っていた証拠だ。いつもなら静蘭相手に（武術の鍛錬と称して）暴れるのだが、捕らわれてからは逃げ出すために体力を維持することを忘れてしまっていた。

これ以上走り続けるのが無理なため、近くにあった人気のない室へ忍び込んだ。

中は薄暗く誇りが溜まっていた。使われていない証拠であり、頻繁に人が来ないという事実でもあった。

辺りを見回すと、箆笥や机、大小様々な箱や葛籠くわろうなどが置いてあった。物の配置と寝台がないということは、この室は物置として利用されていた可能性が高いと判断した漣は箆笥の影に隠れると、呼吸を整えながら思い返した。

走っていた時は何も思わなかったが明らかにおかしい所が多々ある。

普通の貴族の屋敷にしては広すぎるし、人が少なすぎる。

景色は単調で他の屋敷の影がない。まるで山一つを屋敷にしたような感じだ。こんな奇妙な場所に屋敷を構えるだろうか。それに屋敷を維持するには大勢の人の手が必要となる。そうなれば山の中腹や山頂よりも麓に構えた方が便利はず。

この広大な屋敷で逃げ回っていた時、人とすれ違ったり見かけた

人は5、6人程度。皆、珍しいものでも見るように眺めるだけで、最初の少女のように襲ってはこなかった。ならば最初の少女の後ろから現れた人影は何だったんだらうか。

ちゃんと人影に見えたのだ。

「考えたって答えは出ないわ。ここは私の常識が通じないみたいだし……」

疲れていた体に力を入れて立ち上がると、あたりを物色し始めた。箆笥の引き出しを開けたり、長筒や箱を手当たり次第開けた。中に入っているのは、古びた鏡に真新しい鏡、飾り気のない銅剣に彫刻と宝石に飾られた短剣、翡翠の首飾りや瑪瑙の耳飾り。後は、珍しい小石と飾りに使えそうにない欠けた宝石。どれも必要ではないが、迷惑料としていただいていくことにした。

「こんな広い屋敷だから、もっと良いものがあると思ったのに」

それでもちゃんと懐に入れる漣。手に入れた迷惑料の使い道を思案しながら、開けていない長筒や箱を探した。物置として利用していた為に、高価な物はあまり見つけれなかった。それでもお金に換えられそうなものは、迷惑料と攫われていた間の賃金仕事の給料分として頂いていくつもりだった。

次に見つけたのは嚴重に縛られた箱。大きくもなく小さくもなく、人ひとり隠れるにはちょうどいい箱だった。

漣は躊躇なく箱を開けた。

「空っぽ？」

と思われたが、無数の小さな何か（……）が飛び出してきた。

漣は咄嗟に顔を背け両腕で庇った。小さな何か（……）は羽音を立てながら室中を飛び回ると、障子を突き破って姿を消した。

「一体何なのよ」

疲れ切っていた漣はこれ以上何も考えなくなかった。だが、小さな何か（……）が出てきた箱だ。中身がどうなっているか確かめたいと好奇心が働いた。中身を覗こうと縁に手をかけ、体を持ち出した。

「底に何かあるのかな。光ってる」

漣は手を伸ばし、体を中に入れた。それでも”光っている”ものにてが届かない。

「どうして届かないの」

独り呟いていると底が消えた。さっきまで手が底についていた。

なのに今では底はなく体が急降下していた。突風のような激しい向かい風を受けながら、理解できない出来事に漣は茫然としたまま暗闇を見つめていた。

その先には何も無い。

もし助かったとしてもあの真っ白い室へ戻るだけだ。命は助かる。生きていれば、また機会はやってくる。今度は鍛錬しよう。ちゃんと逃げるために体を鍛え、情報を仕入れよう。

次こそは、ちゃんと逃げきろう。そう思うと暗闇に身を任せ瞼を閉じた。

はつきり言ってクタクタだった。

04 奇妙な人と奇天烈な話（前書き）

今回はオリキャラが出張っています。

04 奇妙な人と奇天烈な話

「気が付いた？薔薇姫」

瞼を開けるとそこは、今にも壊れそうな一室だった。思い出の中の家と同じくらいボロボロの小屋のような場所だった。

横になっているのは、堅い寝台と思われるものだった。

予想していた場所とは違い困惑を隠せないでいた。

体には包帯が巻かれてあり、怪我していることを物語る。まだ眠りから覚めた状態で痛みを感じることはなかった。

「よく助かったわね、薔薇姫。あの絶壁から落ちてきて。絶対死んだと思っただけど…っていうか、こんなところに居たら見つかるわよ」

ニヤニヤと笑うのは二十代半ばくらいの艶のある女性。黒い髪は一つに結び上げていた。黒い瞳はどこか懐かしそうに綻んでいた。どこにでもいそうな人だった。ただ着ている服はどこか異国を物語っていた。

「あたしがたまたま通りかかってよかったけど…黒狼はどしたの？北斗は？珠翠は元気？」

次々と知らない名前が出てくることに、戸惑ったままいると女性はおかしそうに語りだした。

「懐かしいわ。あの時を思い出すわ。無数の追手。あの屋敷にどれだけ隠していたんだって感じでさあ」

助けてくれたことには感謝するが、人違いのまま訳の分からない事を聞く程今の漣に余裕はなかった。

「人違いです」

「何言ってるの？自分のことなのに…それともただのそっくりさん？」

表情豊かな女性は大げさに驚いて見せた。どこか人を馬鹿にしたかのようにも見える。

「薔薇姫はお伽話です」

痛みでつい顔をしかめた。女性はゆっくりした足取りで近付いてくると、顔を覗き込んだ。

「大丈夫？無理しない方がいいわよ。思っている以上にヒドイ怪我だったし。擦り傷、切り傷、打撲、脱臼、あとは……忘れた……。とりあえず、応急処置はしているわよ。医者に見せた方がいいかなあ……なんて思ってたんだけど……いろいろと不味いかなあ……って思ったし、近くの村まで行くのも面倒だったから止めたわ。……本当に薔薇姫じゃないの？……なら……娘……だったりする？……秀麗……なわきやないか。生まれていたとしても、こんなに大きいわけないし……もしかして……薔薇姫って頑張ったの！？うつそあ……。絶対無理だつて言つてたくせに！二人も産んじやったの！？うわあ……これって……あたしのせいなわけ？……あたしが居るから……怪我は治せるんでしょ？」

漣は話を聞き流して今の状況を確認していた。

絶壁ということは、山頂に居た可能性が高い。ということは、やはりあの摩訶不思議な屋敷は金持ちの屋敷ではなく、もっと位の高い彩七家かそれに通じる家柄である可能性がある。そうなれば、いくら父が紅家本家と関りを切っていたとしても叔父たちが黙っているわけがない。きっと探していたはずだ。だが、誰も来なかった。それはあの叔父たちが情報を掴めないでいたということになる。もしくは彩雲国ではないということだ。

「ふう」

漣は思わず溜息を吐てしまった。自分の持つ情報を把握しても分からないことが多すぎた。もし本当にここが彩雲国でなければ、家にたどり着くことは不可能に近い。自分の極度の方向音痴を呪いなくなった。上手く逃げだせたのに、次に待ち構えていたのは己の弱点。怪我してなかった思いつきり暴れて、一晩寝てすっきりしたのに。

漣の苦悩した表情を観察していた女性は、思いつきり明るい声で

思いもよらぬことをサラリと言つてのけた。それもついにと言わんばかりに。

「あたしは耀夜^{かくや}っていうの。よろしく。キミの両親とは顔見知り以上魂の友未満……かな」

「えっ……」

自分が言つたことに笑いながら、耀夜は漣を見つめていた。

漣には薔薇姫と黒狼の面影がある。顔全体の造りは薔薇姫だが、瞳に宿る意志の強さや賢さは黒狼のものだろう。秀麗にはない物を持って生まれてきたらしい。それがこれから先、どう進むのかは知らないが。

「……知り合い……」

「うん。顔見知り以上魂の友未満のね」

新たな情報に漣は眉をひそめた。偶然にしては出来すぎである。

耀夜と名乗つた目の前の女性は、新たな敵かもしれない。漣はそう結論付けようとしていた。理由は簡単だ。秀麗の事を知っている事と、何よりも自分を一目見て両親が誰であるか分かっていることだ。それは漣が紅家の人間であることを知っているということである。

漣はこれまで自分から紅姓を名乗つたことはない。ちゃんとした理由から名乗るのを止めている。その理由を知っているのは一握りだけ。その中には妹である秀麗が入っていない。

耀夜は黙つた漣を眺めながら違うことを考えていた。

（こういう所は黒狼に似ているわ。自分の情報とあたしからの情報で”あたし”という人物が敵か味方が決めているみたいだし。まあいくら考えても”あたし”が誰なのか分かるわけないけどね。さて……どうしようかしら……）

耀夜は何か思いつたように含みのある笑みを浮かべると漣を見た。その顔はイタズラっ子が新しいイタズラを実行しようとする輝かしい笑みだった。

「……まあ……いっつか……。もう関り合い持つ気ないし。これから先ど

うなろうと知ったことじゃないし。あたしは傍観者に徹底するつもりだし……。今から突飛もない事を話しますから。信じるかどうかは、キミ次第って事で、ひとつヨロシク」

耀夜は漣の返事を聞く前に話し出した。途中で遮る事は許さず一方的に話し出した。

異世界から訪れた、と。

この国を知っているし、この先のことも知っている、という。

紅秀丽は、女性初官吏として歴史に名を残すという。だが、官吏として生きていくには途方もなく困難が待ち構えていて大変である、と。

この世界に来て約20年近く過ごしている。この20年の間にいろんなことをしては失敗したり、成功したりと波乱万丈な時間を過ごしてきた、と。その僅か数年間だけ両親と共に過ごしていた。本人いわく、絶対一度は逢ってみたかった、と。それで忍び込んで強引に出会ったら意気投合して親友になった、と。

そして漣を一番驚かせたのは、母はかつて薔薇姫と呼ばれて捕らわれていた、という事と、父は黒狼という名で主上の懐刀として生きてきた、と。

話を聞いて、耀夜がどこの誰で、これから先どうなるろうとどうでもよくなった。

「キミは信じる？信じるなら、この後の事を詳しく教えてあげるよ」

それは漣を試しているかのように囁いた。

何を試されているのか理解できなかった。

「ただし」

今まで見せていた顔ではなく、真剣そのもので相手を観察している眼差しだった。

「名前は何ていうの？」

「漣です」

「違うわよね。あの二人の子供なのに”漣”って……絶対違うわ」

耀夜は確信していた。その事に漣が驚愕した。

目の前に不審極まりない耀夜と名乗った女性に対して初めて警戒した。

「もう一度聞いわよ。あなたの名前は？」

05 覚悟という名の旅立ち（前書き）

耀夜さん出張ってます

05 覚悟という名の旅立ち

「じゃあ、言い方を変えるわ。これから先の情報は名前と引き換えにしてあげる」

耀夜が意図としていることが分からず、漣はだんまりを通した。

「このままだんまりを続ける？時間はいくらでもあるし、構わないわよ？」

しばらく二人は黙ったまま視線だけを合わせていた。

先に顔を上げ口を開いたのは漣だった。漣は一つ疑問に思っていたことがあった。

「…どうして私の名前を知りたいんですか？」

「理由ならないわよ。ただの興味本位だけ」

あまりにちゃんとしていない理由に漣は思わず体を動かした。

「うつー！」

痛みで顔を顰めた。それでも右手を拳にして寝台を叩きたかった。あまりにも理不尽すぎるのだ。興味本位だけで名前を知ろうとする、その心根が許せなかった。

怒りで右手の爪が手の平に食い込んでいるのが分かる。さらに傷を負うことにためらいはなかった。

「それと、覚悟を知りたいだけ」

まだ耀夜が言おうとしていることが分からず、漣は警戒を緩めず顔を上げなかった。

「これから先の情報で、助かる人もいるし、助からない人もいる。本来なら死ぬべき人が生きて、生きるべき人が死ぬかもしれない。命の重さをキミは背負うことになる。キミは背負える？運命を相手に覚悟を決めれる？キミの大切な何かを代償として失うかもしれない。先のことははっきりと分からない。それでもキミはキミの名前と引き換えに情報を手に入れる覚悟はある？」

その言葉に思わず顔を上げて耀夜を見た。言葉とは裏腹に真面目

な顔で見つめていた。ゆっくりと両手を伸ばし、拳を作っている右手の指を解き出した。一つ一つ丁寧に優しく解くことで、漣の警戒を緩めようとしているようにも思えた。小声で「ごめんねえ」と言いながら、耀夜は漣を抱きしめた。怪我を考慮してか体を密着することはせず、両手で軽く触れるくらいの浅い抱きしめだった。そのままの体勢で言葉を続けた。

「さっきも話したけど、名前には興味ないのはホントのこと。どうせ薔薇姫の考え合つてのことだろうから。それを知った所でどうこうしたわけじゃない。それは分かつて」

漣が頷くと、耀夜は体を離れた。

「んじゃ〜話そうね。一度しか言わないから。たぶん全部覚えることは無理でしょ。あたしも詳しくは覚えていないと思うし。覚えている範囲で話すからね」

今までの緊張はどこふく風の如く、明るい声で話し出した。

展開の速さについて行けず、耀夜に流されるように聞き入った。

秀丽が16を迎える春に動き出す……と。

すべての話が終える頃、漣の怪我はほぼ完治へと回復していた。自分の回復力に驚いていたが、耀夜は「やっぱり治せるんじゃないの」と言った。

「こんな大怪我したこと自体初めてだったので…」

耀夜は呆れ半分で漣の怪我の具合を見ていった。怪我が深い物はまだ治ってはいないが、浅かった傷などはほぼ治って、傷は痕を薄くなっていた。

「薔薇姫たちも何も言わないのも限度があるわよ。知っていて対処するのと、知らないで対処しうるのじゃ意味が違ってくるんだから」「どういうことですか？」

「簡単よ。そうねえ…例えば、明日雨になるとする。キミならどうする？」

「雨が降っても大丈夫なように、今日中に洗濯や買い物を済ませます」

「そういうことよ。」明日は雨”って知っているから出来る行動でしょ。情報は大切よ。どんな時も情報一つで良くも悪くもなるからいつでも情報だけは手に入れられる状態にしておかないと、機会を逃すし、失敗もする」

「情報は大事ですね」

「これからどうするのか知らないけど、情報だけはしっかり手に入れておいて間違いないわね」

怪我の確認を終えた耀夜は、立ち上がると自分の荷物と思える包みまで行くと振り返った。

「ここから東へ半日くら歩けば村があるから、そこで適当に過ごすのもいいし、帰るのもいいと思うわよ。それじゃ」

耀夜は片手を上げ、立ち去ろうとした。

「ちょ…ちょっと待ってください」

「何？」

「置いていく気ですか？」

「そうだけど」

漣は絶句した。こんな所で死にたくないと思死に耀夜に話しかけ出した。

「私一人でどうやって…」

「さあ？」

「せめて村まで連れて行ってください」

「え…」

「じゃないと、絶対生き倒れる自信があります！」

「もつと他のに自信持とうよ」

「方向音痴なんです」

「うわあゝどつかの誰かと一緒じゃん」

「誰ですか？」

「李 絳攸」

「知り合いの方ですか？」

「いや、これからキミが合うはずの人。屋敷で遭難出来るくらい方向音痴な人。キミもそれくらいの方方向音痴？」

「屋敷では迷いはしません」

「なら、大丈夫でしょ」

「何を根拠に！？」

「根拠なんてないわよ。もし、ここを離れて生き倒れるんならそれまででこと。反対に生き倒れず村まで辿り着いたら運はまだ続いているってこと。必然なら必ず運は付いてくるものよ。こうしてあたしと出逢ったのも必然だし、縹璃桜との出逢いも必然ってこと」

「縹璃桜？」

「キミを攫ったのは縹家の当主、縹璃桜だと思うわよ」

「どうして攫われたって知っているんですか？」

「漣が薔薇姫に似ているから」

母に似ていることは形見をそのまま持っているようで誇りに思えて嬉しい、が、それだけの理由で攫われたんじゃ怒りも込み上げてくる。本人を前に怒り爆発しなかったのが、もったいなく思える。もつとちゃんと話を聞いていればよかった。

漣は縹璃桜を「いつか必ず殴ってやる」と心に刻んだ。縹璃桜ついでに、今まで半信半疑だったことを聞いた。

「本当に母は薔薇姫本人ですか？」

「そうね。それは大したことじゃないと思うけど」

「大それたことでしょう」

「どうして？」

「だって…あの薔薇姫ですよ！！」

「たまたま母が薔薇姫という肩書をもっている存在だっただけよ。薔薇姫っていうより紅仙だけだね」

「紅仙!？」

新たな事実には漣は耳を疑った。漣が一人で驚愕したり、疑ったりと百面相していることに気づかない耀夜の話は続いていた。

「……嫌っていた人間に興味を抱かせたのが、漣の父である黒狼……じゃなかった……邵可なんだよね。二人の出会いが奇跡ならば、キミたち姉妹が在る（いる）のもまた奇跡ってね。知ってる？奇跡って人だけが起こせるんだよ。人と人との繋がりや、人の行動で奇跡は生まれる」

あまりの情報の量と事実には漣の理解の度を超えていた。けども覚えられるものはすべて覚えた。

漣は話を長引かせどうにか一緒に村までは連れて行ってもらった。その村で着ていた服を売り、男物の服を買った。髪も切って売った。これからのことを思うと男の恰好の方がよく思えたからだ。攫われた時から外す事のなかった小さな雫の形をした二つの透明の石の間に大きな雫の形をした耳飾は、懐へとしまった。

漣はこれから5年間で力をつけようと決めてた。

父様や秀麗たちには、悪いがもうしばらく”行方不明”としておこつと思う。静蘭、二人をお願いね。ちゃんとお土産は持って帰るから。

今戻っても秀麗の力にはなれない、何の役にも立たない。そのままではいけないと思う。

これからのことを知った今だからこそ思う。
もっと力が欲しい。

知識が欲しい。

だから国中を見て回ろうと思う。

次逢うために、成長しておきたいから。

「漣の行く道に幸があらんことを」

耀夜はそれだけ言うつと、歩き出した。その背中を漣は見送った。

耀夜の事は詳しくは分からなかったが、漣にとっては師匠と仰ぐ人物へと変わった。

最後まで名前を教えなかったが、最後に「漣」と呼んでくれたことは嬉しかった。

この別れの後、二人が出逢うことはなかった。

耀夜が言った通り「傍観者」としていたことになる。

耀夜が活躍するのはまた別の物語である。

漣はこれから5年という月日をかけて国中を回り力をつけることになる。

たくさん仲間、大量の知識、大きな組織、その他諸々を作り上げ、その時を待つのだった。

05 覚悟という名の旅立ち（後書き）

おまたせしてすみません。やっとアップできました。

誤字があり訂正しました

06 哀愁と思い出

毎年、漣がいなくなつた日が来ると、紅家（邵可、秀麗、静蘭）の皆は家から出なくなる。

その日だけは家にいて、漣がいつものように明るく元気で笑つて帰ってくるかもしれない、と、思っていたからだ。

いや、そう願っていたからだ。

灯が消えたように物悲しくなつた紅家を支えたのは漣の最愛の妹、秀麗だつた。漣の明るく元気で強者な性格を真似する日々の中に、漣を思い出し涙することもある。だけど、父と静蘭に心配させまいと涙を拭う。そして、いつか、絶対、帰ってくると信じて今日も、家計を支えていた。

心が挫けそうになつた時、必ず思い出すことがある。

それは母が居て、家中が明るく賑やかだつたころ。

「これが最新作。珍しい物で作つたんだ」

それは熱に反応するという珍しい石で飾つたこの世で一つだけの物を手渡された。

「今回は細工師の雲樞うんかいさんと彫刻師の清紋せいもんさんに協力してもらつたよ」

満面の笑みと「ぬふふ」と自慢げな笑いと共に漣は、はしゃいでいた。今回の物は自身でも満足に出来たのだ。

「同じ物は二つとないんだよ。これはこの世でたった一つだけ物なんだからね」

まだ幼いながら、いろんな物を作つては家族に配っていた。材料

を手に入れるために、平気で家を飛び出しては2、3日帰ってこず、周りを心配させていた。

父と母は楽しそうに怒り、静蘭が静かに説教するが、漣はやめることはなかった。

「わたしたち家族しか持っていないものだから、なくさないでね」

漣は自慢げにひとつ取ると秀麗へ近づいた。

「秀麗はこれ、ね」

貰った物はまだ似合わないもの。だけどこれから先のことを見越してのもの。四枚の花びらの中心に琥珀色した石が付いた簪^{かんざし}。熱を帯びると琥珀色から朱に近い色へと変化する。

「ありがとう、ねえさま」

「どういたしまして。これがあれば、再会できるからね」

この言葉に深い意味はない。ただ「世界に一つだけのもの」であることを強調したいだけに言ったものであった。

「次は静蘭」

静蘭には、三つの雫の形をした水色した石が付いた首飾り。この石には見た目には分らないが、細やかな模様が彫^うってある。ある事をしないと模様には気付かないものだった。そのため模様に気づくのはもつと先のことだった。

「…ありがとうございます…」

熱を帯びると青に近い赤へと変化する。うれしい半面、この珍しい石を手にするために無茶をしたと思うと複雑な静蘭は、顔が綻んでいることに気づいてはいなかった。

「これは私」

小さな雫の形をした二つの透明の石の間に大きな雫の形をした耳飾。熱を帯びると鮮やかな赤へと変化する。

みんなに見えるように一回りして自分の耳に付けた。

「これは父様ね」

父には、三連の指輪。指輪一つ一つに石が付いている。一連目には石は鳳凰が彫^うってあり、二連目には大中小の石が一つずつ付いて

いて、三連目には麒麟が彫つてある。熱を帯びると紫色から濃い赤色へと変化する。

「ありがとう。おや、ぴったりだね」

「でしょ。バレないように測つたんだよ」

父の言葉に漣は溢れんばかりの笑顔を見せた。

「母様はこれ。んも、これが一番手間がかつたんだからね」

家族全員分の石が付いた四連腕輪。熱を帯びるとそれぞれの石が変化する。

「ほお、よく出来ている。これは苦労したじやろくに」

一連目には薔薇の花と蔓が彫られてあり、二連目には鳳凰が彫られ父と同じ石が付いてある。三連目には静蘭と同じ石が付いている。四連目には麒麟が彫られ漣と同じ石と秀麗と同じ石が付いてある。

「どれも職人技が光つておるのお。これは、職人にお礼をせねばならぬな、邵可よ」

「これ程の物は今まで見たことないね」

両親の言葉に漣は一瞬にして顔色を変えた。

「ほめるなら、わたしをほめてよ!!」

心外とばかりに漣は声をあげたが、一向にほめる気配はなかった。むしろ職人たちをベタほめしだした。「この図案は素晴らしい」や「この石も珍しいですね」や「秀麗のを見せてくりや」や「静蘭は青から赤に変わるんだね」や「かあさまのきれい」などなど、漣を無視して語り合っていた。

両親はチラリと漣を見ると頬が膨れ上がり、先ほどまでの満面の笑みがなくなっていた。変わりに不機嫌を絵にかいたような表情をして立っていた。それを見た両親はクスクスと笑い始めた。いろんな物を作り出し、思考が大人びている漣。それなのに見せる表情は間違いなく子供である。そのことにどこか安堵していた。だから作る度、子供であることを確認するようにからかってしまふのだった。

「何をふくれておるんじや」

「…作るために無茶をしたんじやありませんか？」

静蘭の静かなる言葉に漣の視線は泳いだ。

「作るの結構です。好きにしてください。無茶や危険なことだけはやめてください、と何度言ったらわかるんです!」

「別に無茶してなし、危険なことしてないよ」

「嘘です」

漣は「静蘭のバカア」と叫び逃走した。もちろんその後を静蘭は全力で追いかける。

何かを作り出すたび、漣と静蘭は庭中を走り回る。その光景を両親と秀麗は楽しそうに見つめているのだった。

秀麗はこの思いがあるから前を向いて立っていられる。

温かい思い出が寂しさを埋めてくれた。

漣が作ってくれた簪を胸に「かならず、姉様は帰ってくる」と呟くと元気に台所へ向かった。

第一章 はじまりの風は紅く、再び出会うは太陽く

01

帰るべき場所（前書

この章から原作第一巻へ入ります。

「…そろそろ…か…」

黒い碁石を置くと、外を見た。

夜空には星たちが瞬き、月が浮かぶ。

「淋しくなりますね」

「別に戻ってこないって言っているわけじゃないんだけど」

酒を飲み干すと楽しそうに笑った。

「分かっています」

季節は春先。

近頃、冬が終わったばかりだ。まだ肌寒い日が続くが、心はどこ
かしか暖かくなってきた。

「いいですよ。ここは僕たちがいますから」

どこか陽気であっけらかとした声は少年のように高く、楽しげに
語った。

「そうだね、ここは史琉と矢江がいる」

夜空から視線を目の前の人物たちに移す。

暮の相手をしているのは、25～26歳の青年。穏やかな表情に
優しい目元。名を史琉という。

史琉の横にお茶とお菓子を頬張り、勝負の行方を楽しげに見つめ
ているのは矢江。年の頃は13～15歳。

「それに、司瑯もいるから。安心していける」

司瑯と呼ばれた青年は、三人から離れた壁に寄りかかり一人酒を
楽しんでいた。顔の左側に額から顎まで続く傷が勇ましさを物語る。
年の頃は17～19歳。

「好きにしたらいい。そのためにお前は在るのだろっ」

今まで無口を通していたシロウは湯つく知りと視線を向けた。

「そっだよ、あなたはそのため走り続けてきたんだから」

「我らのことはお気になさらずに。あなたが居てくれるだけでいい

のです」

三者三様の言葉に思わず頬が綻ぶ。

「ありがとう。お前たちのためには生きていないのに」

「いいですよ。我々は好きであなたの傍で生きているのですから」

「そうだよ。僕たちに生きる場所をくれたのはあなただけなんだから」

「愚問だな」

「ホント、面白いね。君たちは。そして有能で頼りがいのある」
最後の碁石を置くと、立ち上がった。

「さて、これからわたしの望む未来のために行くよ」

「いつてらっしゃいませ」

「いつてらっしゃい。お土産楽しみにしとくね」

「極上の酒」

「…糸們に…」

「アレなら構わないでしょう」

「そうだよ」

「愚問だな」

「糸們ならもう着いている頃だと思っし」

「…もしかなくても…」

「我々はここから離れることはできませんが、糸們なら可能ですので」

「糸們は嬉々として行っただよ？」

「あいつも好きでやってることだ。気にするな」

「んじゃ、その時までよろしく」

「かしこまりました、お館様」

「はあ、いい、お館様」

「任しとけ、お館様」

お館と呼ばれた若者は、颯爽と夜の闇に消えて行った。目的の場所は一っだけ。

いつも、どんな時も忘れることのない場所。

紫州、貴陽。

帰る場所であり、始まりの場所。

最も大切に大事な者たちが待つ場所へ。

この日、双狼党のお館は旅立った。

双狼党の本拠地、西都を後にした。

第一章 はじまりの風は紅く、再び出会うは太陽く

01

帰るべき場所（後書

次はこれまで出てきた人物の簡単な紹介します

登場人物紹介<オリジナルキャラのみ>

漣^{れん}

（本名は本編で公開予定。それまで待つていてください）

この物語の主人公。耀夜との出逢いでこれから先、進む道を決めた。

秀麗の実姉。

年齢… 秀丽より5つ年上。

容姿… 煌くような漆黒の髪、いつもボニーデールしている黒曜石のような瞳、中性的で整った顔、

白い陶器のような肌、ふくよかな胸、長身（167cm）でスラリとした細身に似合わない筋肉が付いている。

男装… 胸は晒しでつぶし、大きめのゆつたりとした服装をする。首を隠すような服装。

普段は男装を好んでいる。女装（貴族の姫のような正装）すると母である薔君に瓜二つ。

性格… 人当たりがよく、明るい、元氣潑刺、倒れてもタダで起きない、いつも一石三鳥を考えている、手先が器用で何でも作る（そしてお金に換えて大もつけを狙っている）、たまに毒を吐き周りをギョツとさせる、お気楽でひとりで賑やか。決断力・判断力は静蘭よりも正確で早い（隠しているけど）、悩みがなさそうにいつも楽しそうにしている、確信犯的直観力の持ち主。

特技… 家事、掃除、洗濯、家計のやりくり、高賃金の情報収集、金儲けの手腕など、様々なことを完璧に出来る連にも一つだけ欠点がある。それは極度の方向音痴。

耀夜^{かぐや}

誰かに召喚され、彩雲国にやってきた、らしい。

別の物語の主人公（今のところ物語を描くか未定）

年齢…二十代半ばくらい（はつきりした事は忘れたらしい）

容姿…黒い髪は一つに結い上げている。黒い瞳に活発でキツイ印象を与える。身長159cmくらいだが、態度がデカイため少し大きく見える。

性格…文武両道で猫かぶりな性格のわりには、自分に正直で暴走思考。我が道を行く！！面倒見の良い姐御肌。自称、冷静沈着だが、熱血漢で負けず嫌い。何だろうと”負ける”ということが嫌い。要領はいいのになると不器用（無器用）になる。

細工師の雲權うんかい

漣の鼻屑はなづかにしている細工師。寡黙な職人さん。

彫刻師の清紋せいもん

漣の鼻屑はなづかにしている細工師。豪快な職人さん。

<双狼党ふろうとう>

双狼党ふろうとうの詳細は本編に本格的に絡んできましたら、詳しく紹介します

史琉しりゅう

穏やかな表情に優しい目元。

25〜26歳。

矢江やえ

あどけない年相応の少年。

13〜15歳。

司瑯しろう

顔の左側に額から顎まで続く傷がある。

17〜19歳。

糸們しもん

今のところ名前のみで。

登場人物紹介<オリジナルキャラのみ>（後書き）

風邪でダウンしました。

みなさま、体調管理だけはしっかりしましょうね！

健康が一番です。

02 不審人物の到来

色の名を持つ八人の仙と共に築き上げた国。

国の名は彩雲国。

王が住まうは、穢れの無い美しき紫州、貴陽。

人の行きかう都は、色鮮やかな賑わいを絶えず栄えている。

そこへ異質な存在が現れて目を引く。

服装は異国の物である。外套は見たこともないような模様の刺繡を施してあるが、汚れていて見る影もない。沓は柔らかい素材のようで、光沢を放つてはいるものの、これもまた汚れていて何で出来たもののなのか不明である。

背には大きな袋。手には包み。腰には長剣。一見武者修行中の若者か、田舎から出てきた旅人と思われるが、どこからどう見ても怪しい人物には変わりがない。

一言で言えばうす汚い不審者。

長身で細身の身体に、ボロボロの男物の服は似合っていない。所々破れて汚れてほつれて見る影もない。破れている所からは、流れたと思われる血が黒くシミを作っていた。伸び放題でボサボサになった髪には小枝や枯葉が刺さっていた。前髪は顔にかかり、埃で汚れていた。

「やつと・・・やつと・・・着いた・・・」

キョロキョロと辺りを見回しては立ち止まり、見回しては立ち止まりを繰り返していた。何かを探しているらしいことは見て取れるが、あまりの怪しさに誰もが遠巻きにし、声をかけるものは居なかった。今にも倒れそうなほどヨロヨロとした足取りで、目の前にある野菜屋の娘に声をかけた。

「すいません」

「は・・・はい」

思わず上ずって返事した娘の顔には困惑と不安の色が濃く出ていた。娘の事情など気にせず言葉を続けた。店の周りを始め、客たち誰もが固唾を吞んで店先の娘を見守った。ただ見守るだけで、誰一人として助けようとするものは居ない。娘は周りを見渡すが、誰一人目を合わせてくれず途方にくれた。

「紅邵可邸は・・・どっち？」

いろんな事を思い描いていた娘は、相手の質問を理解するのに時間がかった。いつの間にか喉がカラカラになってして、声を出すことが出来なかった娘は、右手で方角をさすとそちらを見た。

不審者は満面な笑みでお礼を言うと言った。満面の笑みをまじかで見た娘の顔は徐々に赤くなり、持っていた物を落とした。

娘の心を驚掴みするのには強力だった。それは見た者にしか解らない独特なもの。

店の主人が娘の肩に手をかけ声をかけるが気付かなかった。辺りに居た人たちも心配になり、ガヤガヤとうるさくなると気付いた。

「大丈夫かい？春榮しゅんえい」

「あ・・・いえ・・・はい・・・大丈夫・・・です」

春榮しゅんえいは向ったと思われる方角を見つめていた。遠巻きにしていた誰もが、春榮の変わりようにさっきの人物に対しての不信感は増すばかりだった。

ただ一人だけ、周囲から距離をとり一部始終を眺めていた者がいた。それは目的の人物が消えるまで見つめていた。

02 不審人物の到来（後書き）

娘さんに名前をつけてみました。
また登場するかは不明です。

03 不審人物の到来？（前書き）

おまたせしました！

更新できなくてすいませんでした。

思ったより風邪がひどくて…。

03 不審人物の到来？

歩いては立ち止り行き先を確認する、という作業を繰り返しながら辿り着いたのは、見覚えのある屋敷だった。

そこは記憶の中と同じだった。いや、それよりも増してすごかった。壁は剥がれ、剥がれた所から草が生えていた。瓦は所々割れ落ち、雨が降ったら……想像したくないように思えた。一段と貧しさが増したような気がしたが躊躇せず中へと入る。

「……誰も居ない……？」

日も傾きかけ夕刻に近いが、この邸には誰一人として人の気配はなかった。

ひとつ、ひとつ、確認するように歩く様は、先ほどのヨロヨロとした足取りではなくしつかりと地に足が着いたように地面を踏みしめていた。

庭先に出てみると、そこは彩りのない荒れ果てた草地となっていた。木々には皮が無く、芽吹く蕾もない。手入れをしたくても、手の施し用がないほど荒れていた。

「ここも、あの時のまま……か」

思わず声に出たことに苦笑するが、気を取り直して邸を見て回った。

どこを見ても自分の中にある記憶と変わりがない。やっぱり、ここが目的の地、“紅邵可邸”であることを物語る。

中庭を通りいくつもの室を通り過ぎた頃、ちょうど目の前に懐かしい場所に辿り着いた。中へ入ると人数分の椅子に食卓を囲むにちょうどいい机。隣は台所で質素で傷み始めた野菜の数々。野菜を手にとると、悪戯つ子のような目を輝かせ笑みを浮かべた。

服についた埃と泥を落とすため、もう一度外へ出て叩く。ついでに顔と手を荒い、髪についた小枝や枯葉を取り結び直した。さっきよりはマシになった姿で台所に立つと、腕捲りし、手際良く本日の夕

食の準備に取り掛かり始めた。

秀麗しゅうれいは貰った本日の夕飯の材料を抱え家路に着いた。

中に入ると、どこからかおいしそうな匂いが漂ってきた。静蘭せいらんが帰ってきて夕食の準備をしているのだと思いき急いで台所の扉を開くと、そこには見知らぬ人物が居た。見知らぬ人物に驚いて、思わず扉を閉めてしまった。

「いったい誰なの？うちに泥棒が入ったって持っていくものないのに」

食卓の机にうつ伏せになり動かない。規則的に呼吸を繰り返し、起きようとしない。その人物はどうやら寝ているらしい。だが、人様の家で堂々と寝ている不振人物に心当たりはなく、秀麗は困惑気味に部屋を覗き込んでいた。

「何してるんです、お嬢様」

秀麗の格好が面白かったらしく、静蘭は笑いをこらえるのに必死になっている様子が手に取るように解った。

「静蘭、驚かせないでよ」

「すいません。どうして中に入らないんです。中に何か？」

秀麗は事の経緯を話すと、静蘭の顔に警戒の色が濃くなった。

「お嬢様はここで。私が中に入り確認しますから」

静蘭は腰に掛けていた剣に手を伸ばし、寝ている相手を起こさないように中に入った。

足音を立てず、息を呑み、静かに相手に近づき、起こそうと肩を揺らす「うーん」と唸るだけで起きようとしなかった。机を見ると自分の目を疑った。

机の上には出来上がり間近の菜りょうりが並んでいた。一人で食べるには

多すぎる量に言葉をなくした。どう見ても3、4人分の量。台所に在ったはずの材料を全部使い切った量に近かった。

約3日分の材料を使いきった不審極まりない相手に殺気を立たせた。

右手は剣の柄を握り締め、いつ抜刀してもいいように構えながら先を進んだ。菜の匂いについて昔のことが頭をよぎった。食卓へ視線を変えると見覚えがある物ばかりで、懐かしさが込み上げる。今まで一度も忘れることのできなかった人を思い出した。

「おや、静蘭なにしてるんだい？」

別の方からの呼びかけに秀麗と静蘭は、驚いて声の主を見た。そこには邸の主、紅 邵可しやうかが立っていた。

中庭を通らず正門から真っ直ぐ入ってきたのだ。

邵可は秀麗を見て静蘭を見て最後に見知らぬ人物に目をやった。

「誰だろう？」

邵可は机の上の菜に目を奪われ、不審人物と菜を交互にみた。

（もしかして…）

淡い期待が心を占めた。

気持ちよく寝ている怪しくて不審人物を、自然に起きるのを待つことにした。

「この人を室で休ませてあげなさい。秀麗、寝所の準備を」

邵可の指示に秀麗は室へ向い、静蘭は柄から手を離すと寝ている人物を抱きかかえた。思ったよりも軽いことに驚いた。抱きかかえられたことに気付かない不審人物は、スヤスヤと寝息を立てて起きようとはしなかった。

両手で抱き抱えた静蘭は、髪で隠れていた顔に驚いて身体力が抜けた。

急に床に落とされ、強制的に起こされてしまった不審人物は、痛い所を擦りながら顔を上げた。そこにはずっと思い描いていた人たちの驚きと戸惑った顔があった。

「ただいま」

思いがけない人の現われに、邵可と静蘭は呆然としたまま動けなかった。寝所の準備をしていた秀麗は準備が出来たことを告げに顔を出すと、突然逢われた人物を見て秀麗も邵可たち同様に呆然とした。

「姉さま？」

秀麗の言葉に満面な笑みで答えた。

「ただいま」

立ち上がり秀麗を抱きしめた。

「可愛くなつたね、秀麗」

ギョツと抱きしめる漣に秀麗は困惑を隠せないでいた。漣は腕を解くと秀麗の両頬を両手で挟むとしつかりと視線を合わせた。

「ごめんね、心配かけて。でも秀麗が可愛くて元気で居てくれたことがうれしい」

もう一度ギョツと抱きしめた。懐かしい香りと温もりに、秀麗は目頭が熱くなった。漣は秀麗の涙を優しく拭くと、邵可の前に立った。服を直し少し照れたように微笑む。

「ただいま帰りました」

「……お……帰り、漣」

すると邵可は先ほど漣がしたように抱きしめた。

くるりと静蘭の方を向くと、意地悪そうな笑みを浮かべた。二人と同じように静蘭を抱きしめた。静蘭よりも頭一つ身長の高い漣。静蘭の首に腕を廻すと「よくも落としてくれたね、後で覚えてるよ」と囁いた。漣を抱きしめようとした手を止めてしまった。過去のあの一部の出来事が脳裏をかすめた。漣はクスクス笑いながら離れると、先程の言ったことが嘘のように「ただいま」と言って微笑んだ。

感動の再会に酔いしれていた紅家。だが、グーと漣のお腹の音で台無しに。

久しぶりに家族が揃い賑わう紅家。

もちろん話の中心は、5年間も行方が分からなかった漣に集中する。

「姉さま、いったいどこに居たの？」

「何をしていたんだい」

「どれだけ心配したと思ってるんです」

三者三様の質問に漣は「あはは」と笑い菜を食べていく。

感動の再会后、秀麗が持って帰ってきた材料で新たに菜を作った。おかげで今日の夕食は豪華になった。

相変わらず、麦飯だが姉の突然の帰郷にうれしくて何もかもがおいしかった。

03 不審人物の到来？（後書き）

まだ寒い日が続きます。

皆様、体調管理だけはしっかりとしましょう！！

04 紅家最強姫の日常 午前（前書き）

おまたせしました。

帰ってきてからの日常を少しでもどうぞ！

04 紅家最強姫の日常 午前

漣が戻ってきて数日が過ぎた。

3人だけだった暮らしが嘘のように思えてくるほど、漣の存在は違和感なく溶け込んでいた。

時折、邵可は今までのことを聞こうと、それとなく話題を振るが曖昧に濁しては聞き流していた。

「おはよう、秀麗」

毎日の日課となった姉妹の抱擁の挨拶。

最初の頃は秀麗も嬉しくて、漣のなすがままにされていたが、流石に毎日ともなるとうざくなり始めた。すると、漣は敏感に感じると涙声になり秀麗に尋ねるのだった。「嫌？わたしのこと嫌いになった？」と決まって聞くのだ。すると秀麗は慌てて「違うわよ。姉さまのこと大好きよ」と否定すると、漣は満面の笑みを浮かべて抱擁する。その繰り返しの日々を過ごしていた。

静蘭は巧く操作していると思う。そんな静蘭の心の声に反応したかのように漣は決まって「静蘭も抱き締めたいらしいヨ？」と秀麗にふり、静蘭を凍らせると何も無かったように朝食の用意をする。静蘭が注意しようとすれば今の”倍の反撃”をくらうため、沈黙を守り続けるしかなかった。

朝食後、皆は仕事へと向かうため日中は屋敷で過ごすようになった。

家族に「絶対に外に出ないで！」と懇願されたためだ。

一人分の食いぶちが増えたため、秀麗は今までの賃金仕事と割と払いが良い仕事二つをこなす様になった。静蘭も内職を増やし家計を助けていた。漣も西都さいとから持って帰ってきた日常品とお土産を売り払おうとしたが「もったいない」の一言で止められてしまった。

今では静蘭の内職を奪いつつ、刺繍や敗れた服などを繕ったりしている。上手く出来た刺繍は秀麗頼んで売り払ってもらい、家計の足しに変えていた。

今日も皆を見送ると漣は陽のあたる縁側で刺繍をしていたら来客が訪れた。

「お館様」

久しく聞いていない呼び名に漣が顔を上げると、しばらくぶりに見知った人物がいた。

「久しぶりだね、糸們しもん」

簪で緩く編んだ髪は、背中まで流していた。化粧を施した美しい人物が艶のある微笑みを浮かべて立っていた。手には大きな風呂敷と足元にも同じくらい大きな風呂敷があった。

「門番が居ないなんて、不用心ですよ」

「いいの。持つて行かれるような物はないから」

「それにしても…お館様お一人で何をなさっているんです？」

「刺繍」

予想外の答えに糸們しもんは大笑いし始めた。漣は糸們の大笑いを無視して刺繍を続けた。糸們がここに訪れた理由は分かっていたが、あえてそのことには触れず黙々と刺繍を続けた。糸們を相手にすると、いろんな意味で疲れてしまうのだ。

「あははははははははは。笑った。笑った」

一通り笑い終わると満足げな顔をした糸們は、漣の隣に持つてきた荷物を置いた。

「はい。頼まれていた物が届きましたよ」

「ありがとうございます」

漣は視線を上げることなくお礼だけ言うと刺繍を続けた。

「中身確認します？」

「しなくてもいいよ。間違った物は入ってないだろうし」

「開けてみてもいいです？」

「見たいの？」

「はい！」

漣の返事を待たず、糸們は手に持っていた風呂敷を解き始めた。中には衣類が入っていた。淡い桃色の服が数点、もちろんこれは秀麗のために注文していた物だ。次に男性用の服が数点。淡い色で機能性を重視した服は静蘭用に、ゆつたりと風格を重視した服は邵可用に作ってもらったものだった。後は色鮮やかな刺繍の糸に毛糸、飾り用の紐、飾り帯を数本、絹に麻布と大量の布が入っていた。結構な量が入っていたのも関わらず、糸們は苦悶の表情一つ浮かべずに持ってきたのだった。

足元の風呂敷には、細々した物が多く入っていた。

簪や首飾り、指輪や耳飾り、どれも装飾品として立派に飾られるための物だったが、漣はこれ売るために持ってこさせたのだ。珊瑚や瑪瑙、琥珀や翡翠といった宝石類も多々入っていた。中には秀麗に似合う物も入っていて、それは渡すつもりでいる。静蘭が欲しい（渡す相手が居れば）と言えは渡すつもりでもいる。もちろん”からかい半分、いじめ半分”の品物としてだ。後は書物が多数あった。これは他国の物を写して邵可に渡そうと持ってきたのだ。

糸們は一つ一つ手に取り確認するように見ていった。どれも欲しいとは思わなかった。それは西都に居た頃、すでに読んでいたり持っていたりするものが多かったのだ。

「お館様は器用だから何でも作りますよね。これもお館様作ですよね」

「そうだね」

「今度、アタシに何か作ってください」

「どうして？」

「自慢したいから！」

思わず顔を上げると、真面目な顔をした糸們が見下ろしていた。真剣な目で漣を見つめ、刺繍を見つめ、涎が出るほど物欲しそうにしていた。

「誰に自慢するの？」

「狂犬とか、番犬とか、忠犬とか、猛犬とか、駄犬とか？」

名前を上げた連中に思わず眉間に皺が寄った。

「四犬に…かよ」

漣は相変わらずの仲の悪いさに溜息を吐いた。

四犬とは漣が最初に出逢った連中の事を言う。”双狼党”という名前も彼らの習性…基…彼らの犬のような存在を指して命名したただけだ。単に思いつかなかったから…とか…犬っぽい…とか…安易な理由ではなかった…はず。

きよつけん

狂犬は、お館様一筋でお館様大好き。戦えば辺り一面血の海と化する凄腕の剣士二人組。

ばんけん

番犬は、頑固一徹。岩より固い信念と幅広い知識と理屈好きの二人組。

ちゅうけん

忠犬は、忠義に熱く、人情に厚く、熱意をもって説教大好きな二人組。

もつけん

猛犬は、熱血第一、筋肉バカ、体を鍛えること、新しい武術・体術を研究したりするのが大好きな二人組。

だけん

駄犬は、何してもダメだけど、行動と言動が癒し系の二人組。

以上が”四犬”と呼ばれる連中のこと。

双狼党が機能し始め部下も増えてきた辺りから、彼らはお館の直轄の部下となった。いつもは”おつかい”と称して遠出させておりほとんど傍にいない連中だが、戻ってくると糸們たちと衝突し乱闘し建物を壊すといったことが日常だった。争う理由は一つだけ。お互い”お館の傍”を争っているのだが、漣はその事に関して気付いていないのだった。

れいら

「そうそう、今アタシは玲羅と名乗ってますので…よろしくです」

「はいはい」

「由来は…」

「聞いていないから」

糸們の相手も面倒くさくなってきた漣は曖昧な相槌と共にせつせと手を動かしていた。今回の刺繍の柄は”大輪の牡丹”を布一面に

描いていた。端の方には蕾の薔薇の花。蔓を伸ばし布全体の枠とな
っている。漣は一度作り出すと、途中からなぜか凝った柄を描いて
しまう。今回の刺繍も本当は”大輪の牡丹”のみにする予定だった
が、思わぬ事（糸們的来訪）で熱中してしまった結果だった。

「聞いてください」

「遠慮しとく」

糸們は膨れた面をしながらも嬉しそうにしていた。ニコニコと笑
いながら漣の傍に居れることを楽しんでた。そんな事に気付かな
い漣は、追いつ返そうとつれないことばかり口にしてた。

「仕事は終わったんなら帰りな」

「もっとお館様としゃべりたいのに」

「帰りな」

「分かりました。帰ります。ですが、また何か在りましたら連絡く
ださいね」

引き際の良い糸們は来た時と同じくらい颯爽として帰っていった。
「人選間違ったかな…。4人の中じゃ一番適役だと思ったんだけ
ど…」

糸們的疲れる訪問が過ぎ、いつも以上に疲れた漣は出来あがった
刺繍を手にも一度自分の室へと戻った。刺繍を室に置いて新しい布を
持ってきた。まだ秀麗たちが戻ってくるのに時間があるので、もう
一枚刺繍をすることにしたのだ。今度の図案は桜と竜胆と百合。糸
們が持ってきた刺繍糸で豪華に仕上げることにした。今日作ったこ
の2枚は「高値で売ってやる」と呟きながら、家族の帰りを待つこ
とにした。

04 紅家最強姫の日常 午前（後書き）

午後は近々UPしたいと思っています

05 紅家最強姫の日常 午後

夕刻、いつもより早く帰ってきた秀麗と一緒に買い物へ出かけた。昔と同様の値切りという名の無料たふで買って（もらって）いく2人に常連の店では、やや困り顔で対応されていた。それでも買って（もらって）漣はやはり強敵なのだった。そこへ仕事を終えた静蘭という名の荷物持ちが登場すると、漣は再び買い物巡りという名の散歩を楽しんだ。もちろん左手は秀麗の右手と繋がっている。いなくなつたあの日の続きを楽しんでいるように見えたのだった。

夕食の準備をし、菜卓じょうの上に並べて行く。

卓には父がいた。静蘭と秀麗で菜を運び、取り皿を漣が運ぶ。すべての料理を運び終えた頃、秀麗は意を決して、さりげなく聞いた。「姉さま、今まで（・・・）、どこで（・・・）、何をしてたの？」急に真面目な顔になる姉。父も静蘭も静かに待つ。だが、返ってきた答えに一同は呆然となつた。

「秀麗。実は……」

一同は息を呑む。今度こそ話してくれるらしい。秀麗は姉が何を言っても驚かないよう顔に力を入れ心を落ち着かせた。

「ちよー愛してる」

満面な笑み付きで秀麗は一瞬にして赤面した。久しぶりの笑顔と愛の告白（？）に無言になる。秀麗が何も言えなくなると、次に父を見た。

「父上、愛してる」

秀麗と同様に満面な笑みで言う。

「わたしも愛しているよ」

漣と同じような微笑みを浮かべてさらりと返した。秀麗と同じように固まるかと思っていた漣は、父の反撃に少し面を喰らう。漣は

誰にも気付かれないように舌打ちした。さらりと流せる父には敵わず、漣は気を取り直して目の前の食卓へ移した。

「んじゃ〜ご飯にしようか!〜」

この話はこれで終わりと云わんばかりに箸を取る。秀麗も父も静蘭も。少しだけ、何かを期待していた静蘭の顔にはぎこちない笑みが浮かんでいた。

料理を一口食べた頃、秀麗は思い出したように呟いた。

「姉さま。静蘭は?」

名前を呼ばれ箸を止めた静蘭。漣は箸を止めることなく返事をする。少し目元が笑っているように思えるのは、静蘭の気のせいだろう。

「あたしは”ちょー愛してる”でしょ。父様は”愛してる”でしょ。静蘭は?」

「そのことね」

漣の何でもなかったような返事に邵可は少しだけ静蘭を哀れに思った。漣は静蘭の反応で楽しんでいることを知っているのだ。

「静蘭は…」

それでも珍しく漣は答えようとする。秀麗はワクワクした表情で漣の顔を見つめている。静蘭はいろんな意味でドキドキしていた。邵可は何も期待せずに黙々と食べていた。

「静蘭は…」

漣は何かを期待したようにキラキラした瞳で見つめる秀麗と、なぜか硬い表情で見つめる静蘭を交互に見た。秀麗はゴクリと唾を飲み込んでいた。漣は面白そうに微笑みながら口を開くと「普通」ただけ言った。漣の答えにあっけに捕らわれた秀麗と静蘭。2人の何とも情けないような素の情に漣は満足し、予想した通りの反応に会心の笑みを浮かべた。

邵可は「やっぱり」と思う。漣は自分が楽しければ平気で嘘をつく。そして相手の反応を楽しむ癖があるのだ。少し静蘭が哀れに思うが、可愛い娘のために何も言わない父親だった。

「普通ってどういう意味？」

「好きでもなく嫌いでもないってこと？」

「なんで？」

「…なんでって言われてもね…」

漣は少しだけ考えるフリをしてニツコリと笑みを見せた。その笑みを見た静蘭はゾクリと何かを思い出した。

（昔…コレと同じようなことが…あった…ような…）これ以上思い出すのは拒否した記憶に静蘭は頭を抱える。

静蘭が一人で頭を抱えていることを知ってか知らずか、漣ははつきりと爆弾発言だけ言った。

「アイシテイルヨ？」

その瞬間秀麗はまた赤面した。静蘭は赤面するよりも真っ青になり始めていた。漣の爆弾発言の本当の意味を理解できるのは、静蘭と父である邵可だけ。秀麗はというと、言葉をそのまま鵜呑みにして将来を想像するくらいだった。

静蘭が冷静になり始めた頃には「アイシテイルヨ」の事など忘れてたかのように今日一日の事を嬉々として語り合っていた。

静蘭は漣が「アイシテイルヨ」と言ったのが嘘だと分かっているも心が揺れたのを感じた。頭では「遊ばれている」と分かっているも、その一言がうれしいと感じてしまう。いろんな感情が自分の中で育っていることに少しだけ顔が緩む。そんな時、悪魔の囁きが聞こえてきた。

「本気にしないでね、せーいーらん」

ゾクリ。

何気ない一言なのに、そこに含まれる感情が正確に分かってしまう。大量の汗を流しながら、返す言葉を搜すが見つからず沈黙を通した。一部始終を傍観していた邵可は思わず助け舟を出してしまう。

「あまり2人をイジメないように」

その言葉に漣は楽しそうに答えた。

「楽しければいいじゃない!!」

邵可も返す言葉を失う。この紅家で最凶なのはやはり漣であること
とを確信するのだった。

06 うまい話には裏があるから目指せ一石三鳥（前書き）

やっと原作へ突入です！

06 うまい話には裏がるから目指せ一石三鳥

今日も皆を見送り一人屋敷に残った漣は毎日の日課の掃除・洗濯を終えると、縁側に座るとお茶を飲みながら日向ぼっこし始めた。

「たまにはゆっくり過ごそうかな」

貴陽に帰って来てからというものの、あまりにも楽しくてつい時間と目的を忘れてしまっていた。それでもしばらくはのんびりしていた。

「いい天気だね。このまま何事もなく過ぎればいいのに」

漣の小さな呟き（ねがい）は、突然の来訪者により砕かれたのだった。

「ただいま」

帰ってくるには早い声に漣は振り返った。

「お帰りなさい。今日は早いね」

「うん、ちょっとね。こちらは……」

邵可の隣には老人がいた。その後ろには静蘭の姿があった。

「……………」

「……………」

「漣、霄太師だよ。霄太師、漣……です」

漣は思いの寄らぬ人物に言葉を無くした。

忘れていた過去がすつと目の前を横切ったような気がした。

「漣？」

「……申し訳ございません。わたくしは……漣と申します」

両手を胸の前で組み合わせ、完璧な跪拝の礼をとった。

「このような所で申し訳ございません。中へお入りくださいませ」

ゆつくりと立ち上がると中へと通した。ぴんと背筋を伸ばし、すべるように歩き出した。その見事に優雅な所作は、漣を女性へと変貌させた。着ている服は男性の物。髪も頭上で一つ結びにしている。

どこからどう見ても女性的な”男性”だ。だが、優雅で気品のある所作で、誰が見ても女性にしか見えなかった。

居間に通すと、一度下がることに許しをもらうと厨房へと下がった。

漣の頭の中はいろんなことが渦巻いていた。

「一体…何考えてるんだ…」

あまりに深く考え込んでいたため、いつもの漣にしては不名誉のごとき失態をしていることに気付かなかった。無意識に体はお茶器の方へと向かうが、行動は違っていた。皿は不注意で落とし、お茶菓子を用意しているのに箸が散乱し、お盆にはなぜか鍋をのせていた。右手には茶器を持っているが、左手にはお玉を持っていたりしていた。

無意識の行動が漣の内面の状況を表していた。顔には見せないがかなり動揺していたのだった。

「……ここが貴陽であること…忘れていたのかな……？」

あれから数年、始まりの日のためにどれだけの事をやってきたのか思い出した。秀丽の夢へと続く道が開かれようとしている。そして漣が望む未来へと向かうことへ繋がるうとしていた。耀夜との出逢いで漣の進むべき道を決めた。そのために家族に悲しい思いをさせてまで貫いてきた。それはこれから先も変わらない。

「ついに始まるのか」

真面目な顔で、真剣な表情で、漣はこれから先の事に思いを馳せていた。だが、体は全く違った事ばかりしていた。今では野菜を微塵切りにしていた。

「漣」

名を呼ばれ散々たる現実を目の当たりにして溜息をこぼした。

「どうかしたかい？」

「何も。すぐにお茶の用意…」

「それはいいよ。私がしたから…それよりも、霄太師が呼んでらっしゃるからおいで」

「…拒否してもいい…？」

「何かあるのかい？」

「別に…ないけど…」

「なら、おいで」

父の人好きのする笑みに諦めると、漣は散々な厨房を後にした。

漣が霄太師の元へと向かった頃、秀麗と静蘭が戻ってきて、散々な厨房を見て愕然と言葉を無くしていた。この惨劇を作り出したのは絶対”邵可”だと2人は決めつけていたのだった。

「秀麗、ただいま戻りました。霄太師におかれましては、此度の私の留守、まことに申し訳なく思っております。長らくお待ちいたしましたこと、深くお詫び申し上げます。さしたるもてなしもできませんが、どうかごゆるりといくつろいださいませ」

秀麗の完璧な跪拝の礼を見た霄太師は、秀麗を立たせ取り留めない会話を始めた。この席に不機嫌でいる姉の姿に秀麗は眉を潜めたが、それ以上気にとめることなかった。

この間も漣は、考え込んでいた。

目の前には朝廷百官の長、霄太師。そして紅家全員に家人の静蘭。どう考えても「良い話」ではなさそうに思えて仕方がなかった。どうにかしてこの席を抜けられないかと思案していると、秀麗の悲鳴に近い声に意識を戻した。

それは丁度「やります！なんつってもお任せくださいっ！」と意気込んでいた。

「秀麗殿、そなたは後宮に入って、王の妃になつてもらいたい。そして静蘭殿も一時羽林軍へと昇進し秀麗殿の側へ来てもらう」

漣は目の前で忙しく表情を変える秀麗と霄太師のやり取りを見ながらお茶を啜った。視線を静蘭に移すと、これもまた忙しく表情を変えていた。傍目には分からないが、漣は敏く表情の変化を見てい

た。唯一、何の反応を見せないのは、父である邵可だった。いつものようにのんびりとお茶を啜りながら、目の前の光景を眺めていた。「そして、漣殿」

急に話を振られ、お茶を飲み干すと霄太師は漣を見ていた。

「はい。何でしょう」

「そなたも……」

「お断りします」

すべてを言い終わる前に即答した。

「なんでじゃ」

思わぬ即答に霄太師はア然とした。だがすぐに持ち直すと報酬の話を切り出した。

「秀麗と静蘭の二人で金五百両じゃったな……わかった。上乘せ百両……」

「お断りします」

漣の物の言いに秀麗と静蘭は絶句した。相手はあの朝廷百官の長である。その相手にぶっきらぼうにも程がある。不敬罪だと言われればお終いだ。

「二百」

「嫌です」

漣は視線を合わせることなく即答した。それを見ていた秀麗は少しだけ冷静さを取り戻していた。

「三百」

「他を当たってください」

漣は一度お茶を注ぐと飲みながら答えた。話にならないと漣は頑として肯定しなかった。

「四百」

「良い娘を紹介します」

答えながらどの娘がいいか選び始めていた。

「五百」

「藍家にでもお願いしては」

不敵な笑みを浮かべながら漣は朝廷百官の長と対峙していた。

「こうなったら…千両でどうじゃ!!」

ついに霄太師は両手を出した。そこでやっと漣はニツコリと満面の笑みを浮かべた。

「承知しました。羽林軍に入ります」

相手が誰だろうが、お金になるのなら容赦しない漣だった。

「な…なんじゃと!!」

「合計、千と五百両で静蘭と同じ羽林軍に入ります。もちろんこの金額にはケガした場合の治療費等を含みます」

話はこれで決まりと言わんばかりに満面の笑顔で霄太師を見つめた。

なぜか目が笑ってなく「これ以上文句言つなよ!？」と語っているかのような表情と視線に霄太師は「ふむ」と言うだけだった。

秀麗と静蘭の2人だけは必死に漣を止めようと奮闘し始めた。

「どうして羽林軍に!危ないわ」

漣はどこ吹く風の如く「大丈夫だって」と繰り返し秀麗を宥めた。

「何が大丈夫なんです!」

目くじら立て怒ったように必死に止めようと静蘭は言うが漣の思わぬ言葉に黙ってしまった。

「金千と五百両だよ?やめる?」

紅家の経済状況を垣間見ての一言に2人は黙ってしまった。だが、それでも漣の身を考えれば黙ってはいられず、言葉を続けようとした。

「瓦、麦飯、白いご飯、桶代、ボロボロの土壁、新しい墨、新しい本、新しい服、新鮮な野菜や肉、野菜の種、鶏の雛…あとは…何が買えるかな?」

現状を言われ2人はついに折れてしまった。漣は2人が折れたのを確認するようにダメ押しした。

「金千と五百両!破格だね」

霄太師に見せた満面の黒い笑顔ではなく、本当に楽しそうに微笑

む。誰もがこの紅家で最強なのは漣であることを再認識した。

話が終わると霄太師は「5日後に」とだけ告げると足早に帰って行った。思わぬ出費に少しだけ顔を青くしていたような気もした。なかった。

霄太師が見えなくなると、漣は面白そうに呟いた。

「名前決めなきゃね。どんなのがいいかな」

「どうして？」

「秀麗と姉妹だと分かるといろいろとマズイでしょ」

「そうよね」

場所が場所だけに秀麗も事の重大さが身に沁みてきた。少しでも早まったのかもしれないと思い始めていたりした。そんな秀麗の心内を知らない漣は、思いついたと言わんばかりに「準備があるからちよつとでかけてくるね」とだけ告げると出かけた。

3人が我に返ったのは漣が町の中へと消えた後だった。

「大変！姉さまいなくなつたわ」

「すぐに探しに行つてきます」

慌てた秀麗と静蘭は探しに外に飛び出していった。残された邵可は漣の行動に疑問を持ちつつ、これから先の事を考えていた。

「何考えてんだ、あの古狸じい……」

邵可の呟きは春風に乘って消えていった。

06 うまい話には裏があるから目指せ一石三鳥（後書き）

やっと原作の第一巻へ突入しました。
おまたせしてすみません。

誤字、脱字、感想、お待ちしております

07 準備は心してかかりましょう？（前書き）

おまたせしました！！

少し双狼党の説明させていただきました

07 準備は心してかかりましょう？

漣が訪れたのは妓楼が立ち並ぶ夜の街だった。
名を姚葩楼ようはろうという。

「ここまで似せることないと思うんだけど…」

この妓楼は西都の本邸（漣が主に暮らしていた屋敷）に似せて作られていた。

広大で豊かな森と山々、大河が2本小さな川が数本が交わる大きく澄み渡る湖がある場所に本拠地である。元々そこには廃宮と廃村があった。忘れられてどのくらい経過したか分からないが、大昔ここに都市が在ったことを物語っていた。

最初は僅かな人数で途方もない時間と手間暇をかけ人が暮らせるようにすると、商人や行き場を無くした者たちが集まり次第に人が多くなった。今では昔の面影のない場所となり賑わいを取り戻していた。豊かな森と山で農業を發展させ、大河を使つて船で運搬と漁業を發展させた。

そのうち噂を聞いた者や盗賊や山賊に襲われ行き場を失った者が訪れ住むようになった。

余談だが、襲つてきた盗賊や山賊たちは、返り討ちにあいその場で命を失った者もいれば、”お館”とその周りに魅せられて仲間になった者もいる。

「まあ、西都あつちの方がまだまだ改築や増築しているからなあ」
漣は苦笑しながら妓楼を見上げた。

表は周りの妓楼となんら変わり映えはしない。唯一違うといえは建物の高さだろう。

地上4階建てで、辺りから異様に浮いていた。

一般的に平屋か2階建てが普通だ。それ以上の高さの建物を建てるとなると大工の腕と莫大な予算がかかる。それを物ともせず建てた双狼党の活動資金は莫大なものと言えよう。そして”姚葩楼”ようはろうは双狼党の支部の一つであり、妓楼が組織の支部だとは夢にも思わない。人の裏をかいた行動の一つにすぎない。

連は組織を作り人が集まってくると、まず本拠地を決めた。次にどんな場所に居ても情報と物資が必ず手に入るようにするため各州に支部を置き人と情報、資金活動と伝手を作り上げた。もちろん、最初から考えて作ったわけじゃない。

耀夜かくやとの出逢いがあったからだ。

あの出逢いがあったから、こんだけ大きな組織を作り上げれたと思っている。

今では国中至る所に支部はある。党員でなければ気付かないように少しばかり豪華にしてみたり、ボロにしてみたりと一見すると分からないように支部を置いていた。それは店だったり、住宅だったり、道寺だったり、それぞれその土地に合ったもので在る。そして州で一番情報が集まる場所に統括場所を作っていた。

各支部では人材育成や引き抜き、賃金仕事や裏稼業などしている。各支部の売り上げが活動資金に回されていることは誰も知らない。そもそも双狼党という組織自体、世間には知れ渡っていないのだ。知っているといえは取引がある全商連の一部と他国くらい。

まだ双狼党は水面下でコソコソと動いていた。まるで裏稼業の如く地道に働いていた。

支部長と総括者の指導能力で各支部の運営は違うが、全体のところ一貫して教育、武術、医術、礼儀は叩きこまれていた。こうした

支部や総括場所を作った背景には情報収集と情勢を把握するため、そして一番大事な事である”お館”がどこにいても欲しい物が手に入るようにしたためである。なぜか双狼党には”お館至上”で”お館命”の者が多く、すべてが”お館”である漣のために動いている。今現在もこの国のどこかで”お館”のため日夜汗だくになって働いている者たちがいる。漣自身そこまですることは無いと思っているが、四連隊（史疏、矢江、司瑯、糸們）たちのことをまとめた名称）と各支部長たちのやる気に水を指すさとはしなかった。と、いうよりは、やる気がありすぎて口が出せなかったのが理由だった。情報収集と人材育成、医術に農工業、学問、あらゆる事に力を入れていた双狼党だ。

誰でも黨員になれるわけじゃない。双狼党に入るには黨員に「入りたい」と希望するか、黨員が推薦でいれるか、または”お館様”直々に「許可」するかのどれかだ。最初の頃は誰でも希望者がいれは入れていた。だが、“双狼党”内部を探ろうとする者が居たため、今では厳重に警戒している。

中には個人的に欲しい人物を引き抜こうとするが、誰ひとりとして双狼党から去った者はいなかった。それは規則で縛っているのではなく、自主的に留まっていて黨員であることに誇りを持っているということだった。それだけ規律がしっかりし、教育がしっかりしているということ。何よりも”お館”という人物の人望でもあるのだ。

今では彩七家や全商連、親分衆さえ太刀打ち出来ないほど大きな組織となった。

以上の経緯があり、紫州で選んだのが貴陽だった。王のお膝元でいろんな思惑が集まる。そこで癒しを求め口が軽くなり、情報を零すであろうと踏んだのが妓楼街だった。

妓楼街で？ 娥楼と並ぶ有名なのが双狼党の姚葩楼だった。

理由は簡単だ。

美味しく珍しい酒と菜、魅惑的な異国の衣服に軽快な曲と舞いを披露し、可憐な花のような娘たちが多くいたためだった。そしてこの妓楼には”貴陽三大美女”と呼ばれる正反対の性格を持つ美女が2人もいるのだ。話題が豊富なため今では国中に知れ渡ることになった。

07 準備は心してかかりましょう？（後書き）

PV14、834アクセス、ありがとうございます！！

お気に入り登録件数21人の皆様、ありがとうございます！

読んでくださる方がいらつしゃるということは、ナント！すばらしいことなのでしょう！と日々感謝しております！

日々、精進していく所存でございます！

08 準備は心してかかりましょう？

「ここまででいいよ。案内ありがとう」

漣の周りには誰もいない。それでも感謝を述べると僅かに風が吹き、漣の髪を揺らした。まるでそれが「了解した」という合図のようだった。

漣は何もためらいなく門をくぐった。

「誰か居る？」

営業するには早い時間のため静かだった。静かな割に人の気配はする。漣はこれからの事を考えながら待っていると、鈴の音のような声が奥から響いてきた。

「誰ですか。まだ開いていないですよ」

現れたのは妖艶な美女だった。年の頃は三十代半ばだが、外見はどうみても二十代半ばしか見えないほど若々しかった。艶やかな髪を下ろし寝巻を着た女性は漣の姿を見つけると、しつとりと微笑んだ。僅かに頬が朱色に染まりはじめた。それは愛しい相手を見つけた年頃の娘のように見えた。

「お館様」

「開店前に悪いね」

「いいえ、お館様でしたらいつ何時でもお越しになられて結構ですわ。できれば毎日お越しになっても良いくらいです」

「漣れいしや紗、ここで”お館様”はやめてくれない」

「相変わらず麗しい方。わたくしと添い遂げていただきたいわ」

毎回の挨拶と人の話を聞かない漣紗にこれ以上会話を止めた。それよりも早く要件を済まし準備をしなければならなかった。漣は勝手に上がると階段へと進んだ。後ろからは漣紗の「つれない方」と呟くのが聞こえたが無視して歩き続けた。

今回漣がここを訪れたのにはいくつか理由がある。

まず一つは羽林軍へ入るにあたって、今の朝廷の情報が欲しいの

と、誰が朝廷にいるのかを確認するためだ。

次に羽林軍と朝廷、そして双狼党へ連絡を繋ぐために人手が必要であるということ。

最後に何か予測不可能なことが起こったとしても対応出来るための下準備のために訪れた。

漣は最上階まで階段を上がると襖を開けた。

最上階は一室のみで他に室はない。この室を使えるのは双狼党の党員でも幹部以上の者のみと限られていた。それはこの妓楼を取り締まっている漣紗と葵蝶きぢようが決めたことだった。

「この所誰も訪れていませんのよ」

後ろから付いてきた漣紗は嬉々として付いてきていた。

「寝てなくていいの？」

「お館様がいらっしやるのに寝てられませんか」

「今夜も仕事でしょ？」

「構いせんわ。お館様の相手が出来るのであれば、仕事など次の次で」

満面な笑みを浮かべ漣紗は断言した。

「それだと守銭奴が怒るよ」

「あら、アレらが怒ろうとわたくしに関係ありませんわ。わたくしがわたくしで在るのはすべて”お館様”のためですもの」

「はいはい」

「ほんつとつれない方」

漣は適当に相槌をすると室を見渡した。

紅家にはない高級な調度品の数々。それは西都から持ってきた物と貴陽で作った物だ。大半は西都から持ってきた物だが、貴陽の職人に同じような物を作ってもらおうと見せた時、なぜか職人魂に火をつけたらしく西都の物以上の品を作ってきた。それも大量に。大量の品は各客室へ飾ると、今度はお客、特に貴族や金持ちから品への興味がゆき、今では妓楼と調度品とを扱う店としても営業をしていた。

「すぐにお茶の用意しますので、待つてくだされませ」

窓を開けると貴陽の街並みが一望できる。

まだ外は明るいため多くの人がいた。店先で買い物をする人や早めの食事を取る人など、いつもの貴陽だった。

「ついに始まる」

漣は遠くを見つめながらこれからの始まる事への決意を断固たる覚悟へと変えた。

「お待たせしました」

漣紗は慣れた所作でお茶を入れ始めた。

「このお茶は……」

懐かしい香りに思わず顔を綻ばせた。

「西都で口に使っていた物ですわ。水仙のお茶。お茶をいれた際の赤褐色の鮮やかな色が特徴的ですわよね」

「香りがいい。うちに持つて帰りたい」

「帰りに差し上げますわ」

「使っんじやないの？」

「あら、また届けてもらえばいいですもの」

漣は漣紗が淹れたお茶を一口飲むとほっと息を吐いた。少し緊張していたらしいことに苦笑した。

お茶を飲み一息つくと、漣は本題に入るため漣紗を見た。

「今度羽林軍に入る事になった」

「まあ」

漣紗は対して驚くことなく漣を見つめながら即座に思案し始めた。

”お館”である漣が言わんとしていることを深く理解し何を求めているのか即座に検討付け始めたのだ。

「今現在、誰が朝廷に居るか、羽林軍には誰が居るか教えて」

「確か……文官に3人。羽林軍は左右共に1人ずつ」

「羽林軍の2人の名前は？」

「わたくしの部下の驍影りょうえいと葵蝶きりょうの所の稜冥りょうめいです。驍影は左羽林軍。稜冥は右羽林軍ですわ」

「連絡とっておいて」

「かしこまりました。他には？」

「今の朝廷の様子と派閥、長官たちの性格から弱点までの情報」

「それなら史琉様が適任では？」

「他にしてもらいたいことがある」

「ひとつ聞いてもいいですか？」

「答えれる範囲であれば」

「どうして羽林軍へ？」

「なりゆき」

「汗臭い筋肉バカたちの元へ？」

「澪紗は眉間に皺を寄せながら言いきつた。

「わたくしの（・・・）お館様が汗臭い筋肉バカ共の中へ入るなんて…許せませんわ。その話をもってきたのは一体誰です？」

「霄太師」

「くされジジイですわね」

「澪紗の美麗な容姿からは程遠い悪口に漣は思わずア然とした。今まで澪紗のそんな姿を見たことがなかったのだ。いつも笑顔で穏やかな彼女のもう一つの顔に驚きを隠せなかったが、自分にも同じような所があった事を思い出した。

「いかにも知っているかのような言い方に少しだけ違和感を覚えた。

「逢ったことあったっけ？」

「大昔のことですわ」

「うふふと笑う澪紗に漣はそれ以上聞くことはやめた。長いするつもりはないのだ。これからまだやるべきことはたくさんある。時間は待つてはくれない。こうしている間にも時は流れて過ぎていく。早く用事を済ませ計画を立てなければならぬ。

「男物の服を数着用意できる？」

「可能です。どのような物をご希望で？」

「質素でありながら丈夫なのがいい。目立つことは避けたいから華美じゃないもの」

「かしこまりました。すぐに用意いたしますわ。他には」

漣は必要な物に細かく注文をつけながら進めていると、久しぶりに聞く声が響いた。

「久しぶりだね、お館様」

丁度、必要な物を決めた所に寝起きであることを物語る格好のまま美女が訪れた。

「あら、葵蝶きぢゆう起きたの？」

漆黒の緩く波のある髪を背に流し、白磁のような肌を惜しげもなく見せている。吊り目の眼には欠伸した名残の涙が浮かんでいた。口元の左下に黒子が艶やかさが倍増するかのようにあった。

「起きたの？じゃないだろう。お館が来ているのに寝てられないじゃないか」

葵蝶は片目を閉じ漣に微笑んだ。

「まあゝわたくしとお館様の時間を奪うのかしら」

漣紗は冷ややかな視線を葵蝶に送ると、葵蝶はため息交じりに「何言っただか。お館は女だろう」と答えたが、漣紗はますます冷やかに「わたくしは構いませんわ。むしろ…」と暴走し始めた。

葵蝶がまともな事を言えば、漣紗は夢見がちな乙女のような事を返す。それをしばらく続けている間、漣は窓辺へと移動し貴陽を見下ろしていた。

貴陽は広くどこまでも続く建物の先に一段と大きく広い場所がある。そこがこの国の王が住まう場所、そしてこの国を動かしている場所。

そこへ行き、すべてが始まる。

心地よい風が漣の頬と髪をなでて行くように、漣はこれから先のことを思っていた。

「耀夜から聞いた」はじまりの時」はもうすぐそこ。

「ああゝもいいよ。お館も何か言っておくれよ」

葵蝶のお手上げな声に漣は、2人を見てにつこりと笑って答えた。
「ええゝ美女相手に何も言えない」

「何言つてんだい。お館も美女だろう」

葵蝶はきつぱりと断言すると、意味深な視線を送った。

「わたしは違うよ」

漣はさらりと避けるつもりだったが漣紗がそれを許さなかった。

「まあ、葵蝶！お館様をいじめないでください」

漣紗はガバッと漣に抱きついた。そして豊満な胸を押し付けた。

「葵蝶はどうしてそうなのです！」

「何が？」

「お館様とわたくしとの夢のようなひと時を……」

「そう言うけど、一方通行だと意味ないだろう」

「一方通行だろうと、何でもいいですよ！」

会話に白熱したす2人を後に、漣は帰って行った。

もちろん手土産として水仙のお茶と珍しいお菓子を沢山いただいた

て。

09 準備は心してかかりましょう おまけ（前書き）

本日2回目の更新です！

ちょっとした小話程度ですが…どうぞ！

09 準備は心してかかりましょう おまけ

漣が帰った事に気付かず、漣紗と葵蝶の会話は続いていた。

「だ、か、ら！」

「うるせーぞー！」

物置の扉を勢いよく開き中から出てきたのは、顎鬚を生やし剛毛であることを表すかのようなボザボサの髪に酒つばを片手にした大男だった。

「あら居たの、江蛾」

名前を江蛾こづがという。三十代前半の強面な姿だが、性格は酒豪の豪快、親分肌。外見の割には面倒見が良いと評判の男だった。元山賊という立場に居たが、なぜか漣が気に入る「仲間にならないか？」と数日間べったりと付きまとわれ、渋々「勘弁してくれ（仲間になる）」と言わせたのだった。

漣に言わせば「意外と良い男でいろいろと使えるよ」である。

紫州に支部を置くことになったとき、支部長を江蛾に決めたのは理由は「親分衆に負けない統治力と人望力、そして（強面な）見た目」だ。

元山賊ならではの強面の姿に子供たちから泣かれ、近所からは避けられ、血気盛んな若者連中らに絡まれ倍返しな日々を送っていた。親分衆にはなぜか気に入られ可愛がられていたりするが、頭が上がない連中がいた。それは今日の前にいる美女2人だった。

「いつ来たんだい？サボリ魔」

「誰がサボリ魔だ！」

江蛾は心外と言わんばかりに2人を睨んだ。

「その酒！！！」

「まあー！！！」

2人の絶叫に近い叫びに思わずたじろいだ江蛾は持っていた酒つばを落としてしまった。

「うつ…これは…その…」

江蛾の齒切れの悪い弁解に葵蝶は眉を吊り上げた。

「一番高いヤツじゃないか」

「金100両取れる貴重な酒ですわ。それも一番いい出来の酒です…！」

「何やってんだい!!」

「ホントに。これが支部長なんて泣けてきますわ」

澪紗はため息交じりの小言。わざと目元を抑え涙を拭く真似までした。

「わかつてんのかい!？」

葵蝶は怒り顔で怒り心頭で激昂中で澪紗の小芝居に気付かなかった。

「わ…悪かった…」

大男で強面なのに、今にも泣き出しそうな顔で平謝りする江蛾。

とりあえず、葵蝶の怒りを鎮めない事には本日の寢床が確保できないかもしれない。それだけじゃなく、お館の耳にでも入っては大変なことになる。勧誘の時の比じゃなくもつと屈辱的な物が待っているかもしれないのだ。

「誤れば済むつもんじゃないだろう!!」

「そうですわ。誤って済むなら、お館様を押し倒しますわ」

一人的外れなことを言う澪紗を無視して葵蝶は平謝りする江蛾を見下ろしていた。

「いいかげんに支部長としての自覚を持ちな!!」

江蛾はこの紫州担当の総括である。そして澪紗と葵蝶の直の上司でもあったが、今ひとつ美女に勝てずにいた。

「オレは早まったか!？」

江蛾の心の声は誰にも届かずにいた。苦悶する江蛾を澪紗と葵蝶は猛然と小言という名の説教を続けた。2人の説教から逃れるには双狼党を辞めればいい。だが、江蛾はその選択はしなかった。何だ

かんだと言って、この場所が居心地がよかったりするのだった。

09 準備は心してかかりましょう おまけ（後書き）

いつの間にかお気に入り登録者が25名様に！！
うれしい限りです！！

3月に入り花粉が飛んでいます。皆様、花粉症は大丈夫ですか？
私はまだ大丈夫です。杉ではないので。
完全防備でこの季節を満喫しましょう！

10 準備万端？（前書き）

長い間、お待たせしました！
やっと、更新です！

10 準備万端？

「ただいま」

足取り軽く帰ってきた漣を迎えたのは、今にも泣き出しそうな秀麗と、怒り半分心配半分の複雑な表情を浮かべた静蘭、そしていつも通りのニコニコ顔の父だった。ちよつとは慌てた父の姿を見たい、と思った漣であったが、それは叶わぬということも知っていた。

「姉様、どこ行っていたのよ！！」

「一言掛けてください」

至極心配そうな秀麗には、ニコリと微笑みを返し、至極説教したそうな静蘭にはサラリと無視した。両手に抱えていた荷物を置きながら、「はあゝ重かった」と呟いた。どさりと置いた荷物は、食材と食材と服と書簡。食材はいつもの通り『傷み始めの家族団欒推進』のため戴いた物で、食材は漣紗れいしゃと葵蝶きりょうから戴いた（取ってきた）お茶とお菓子と果物。漣紗れいしゃに用意してもらった男用の服。そして双狼党本部から届いた書簡を持って帰って来たのだ。

秀麗は置かれた食材たちを一つ一つ見て回りながら量の多さに驚きを隠せなかった。どれも後で買うつもりだったのだ。今日一日の賃金仕事を無くしてしまった為、いつも以上に質素になるか、値切をしまくって材料を揃えるかのどちらかしかないと思っていた。それなのに漣は普段通り大量の食材を持って帰ってきた。それも満面な笑と共に。さっきまでの心配や不安が嘘のように思えてしまう。

秀麗は我に返ると漣を見つめた。

「姉様、一体どこまで行ってたの？」

「どこって、そこまでだけど」

漣はキョトンとしたまま秀麗を見つめた。秀麗の顔には「絶対違う」と書いてあったが、ニコリと微笑んでそれ以上言わせなかった。「よく迷いませんでしたね」

静蘭は冷たい眼差しで嫌味を言ったが、どこ吹く風の如く漣はしれつとまともに答えた。

「当たり前じゃない。人伝に聞いて帰って来んだから」

「それが出来るなら迷ったりしないでしょうね、これからも」

「ほんつと静蘭って性格悪いよね」

本当は違うけど…とは言わず静蘭を見上げた。静蘭は納得していないような眼差しで見つめていた。傍から見れば熱く見つめ合う恋人同士のようにも見えないこともないが、漣と静蘭の二人故にそう見えなかった。

「そうそう、名前も考えたから、今度からはその名前で呼んでね」「どうして？」

「男として行くのに”漣”じゃ、すぐにどこの誰だか見当が付くでしょ。念には念を入れないと。芋蔓式にバレると後々面倒臭いから」「でも姉様はつい最近帰って来たのよ。そんな心配いらないんじゃないの」

「でもね、秀麗。これから先何がどうなるのか分からないのよ。それに”男”としての私の存在は、絶対必要になると思うのよ。名前も決めたし。ちゃんと設定まで決めたのよ。誰に聞かれても大丈夫なのように」

漣は真面目な顔をして秀麗に説明した。その説明は秀麗をはじめ父も静蘭も聞いた。

「名前は紅 真清^{しんせい}。年は21。静蘭より前に紅家に養子に入ってたことで。紅州から貴陽に来る前、本家で養子になった。そのことは本家では禁句となっている。だからこのことで本家に問い合わせても答えは来ない、ということ。まあ、本家にしては知らない事だから、相手にしないでしようし、大丈夫だとは思っただけ…。念には念を入れておいた方がいいかな…。そしたらもつと細部まで考えなきゃね……。これは後で考えるとして、秀麗は”お兄様”か”兄様”か”兄上”もしくは”真清”って呼んでね。養子っていつても家人と変わらないような立場ってことにしとくから。静蘭も、わ

たしを呼ぶ時は”真清”って呼んで。くれぐれも間違えないように、ね」

漣の一方的な説明に3人は開いた口が塞げなかった。ちょっと割高な賃金仕事を頼まれたと思っていた秀麗は漣の準備に脱帽した。事細かな設定が何故いるのか分からないが、この仕事が異様な物だという事だけは分かったのだった。だから漣の説明後、何も言わず一言だけ「わかったわ」と答えた。

静蘭はというと、呆気にとられていた。そこまで考え付かなかったのだ。漣の突飛な行動と言動には十分に慣れていたはずなのに、この話を聞いて度肝を抜かれた。文武において漣よりも優れていると自負していた静蘭は知らずの内にショックを受けていた。

父はというと、感情の読めぬ表情のまま漣の設定を反復していた。漣の説明は、どれをとっても紅家本家にしては些細なことになる。本家に居た時から「禁句」としているため誰一人として”養子”に對することは口に出来ない。しかし紅家当主を知っている者に對してはどうなる。兄大好き次男、黎深。しかし”漣”が”真清”なのだから、「問題無い」しか言いようがない。何て言っても兄一家大好きなのだから。

漣は3人が納得したのを確認すると「んじやく、今から僕は”真清”です」と宣言した。

「もう!?!」

「言い慣れていないと、周りに不審がられるでしょ？後宮だといっても、王宮の一部なんだから、誰が何のために情報収集しているか分からないし。咄嗟に”姉様”と呼ばれたら、羽林軍に入れなくなるし、父上も大変なことになるよ。これ以上禄が減ると、毎日大変だし。ここは徹底的に教育：じゃなかった：呼び慣れてもらわないと!!」

さて、夕食の準備でもしようか、秀麗。いっぱい貰ってきたからね、今日はご馳走だよ。ああ、静蘭が昇格しただんだけ。そのお祝いしよう!! 僕も羽林軍へ昇進だし」

そついうと漣は腕まくりをして厨房へ向かった。その後を秀麗が追う。

今まではどちらかと言えば、中性的だが女性寄りだったが、今目の前で颯爽と歩いていく漣は男性的に見えた。

静蘭は漣の行動の素早さに何も言えず、つい無意識に「旦那様」と呟いた。呟きは邵可の耳に届き諦めた様な声色で「……………仕方ないね。静蘭、頼んだよ」と二人だけの会話をした。それは昼間と同じ会話だったことを思い出した二人でもあった。

10 準備万端？（後書き）

誤字、脱字等、ありましたら連絡ください！
もちろん、感想等もお待ちしております！

11 準備万端？

紅 真清しんせいの初日の夜。

何度か名前を訂正させながら夕食を迎えた。特に秀麗は「姉様」と何度も呼んだ。その度「兄様が真清」と訂正した。それでも間違えるため、漣は一つ提案をだした。

「次間違ったら罰ね」

「えっ！」

罰の言葉に反応したのは秀麗で、静蘭と邵可は程よく距離を保ったまま姉妹を見つめていた。下手に声をかければ、漣が言う「罰」に巻き込まれる可能性があることを2人は理解していた。

「罰は……服を着ること」

「……もしかして……」

「そう。僕がお土産として持って帰ってきた服」

漣さいとが西都から持ち帰った服。紅色の姫装束。同じ紅色でも鮮やかな色で鷹を刺繡し、袖口には淡い黄色の糸で桔梗をあしらった刺繡と紅色の石を縫い付け、腰帯には白紐と紅紐で編んだ幾何学模様きかがくもようの飾り紐。裾は踝くるぶしまでの長さ。真珠と珊瑚で出来た耳飾。金剛石で出来た首飾りに桜色の石の付いた指輪。総額金ン百両以上するであろう服。服と言うな的高级品。それを秀麗に渡したのだ。

もちろん、作ったのは漣と数人の職人たち。作り始めると思った以上に面白くなり、凝った物へと変貌したのだ。本来ならもっと秀麗好みのモノを作る予定だったが、漣の刺繡に職人魂に火を付けた職人たちの暴走は止めれなかった。

服を貰った時の秀麗の顔は忘れられない。引きつったような、困惑したような、嫌そうな顔をしていた。

秀麗だけではなく、父にも静蘭にもお土産は渡した。父には短剣。懐へ隠すことが出来るよう実用性が有り、装飾品としても華美では

ないものを。静蘭には髪紐と女物の服装。もちろん嫌がらせ半分、本気半分のお土産だ。漣は昔から思っていた。「静蘭は女装が似合う！是非、見てみたい！」と。秀麗の服と共に静蘭の服も漣が作り上げた。己の好奇心を満たすために徹夜を3日ほど続けたが、全然苦にならなかった。次の日、他国の商人との会談があったとしても気合で乗り越えた。それほど、見たかったのだ。淡い藤色の布に金色の襟のついた姫衣装。背丈が秀麗よりあるため、奮発した最上級の絹。襟元には藤の弦の刺繍をし袖と裾には金魚草を刺繍。飾り紐の端には堇青石、柘榴石、孔雀石を垂らした。この服装も秀麗の服装と同じように高級品だった。手渡した静蘭は、引つりながらも受け取った。だが、一言きっぱりと付け加えた。「絶対着ませんから」と満面な冷笑を浮かべながら目は笑っていないかった。久しぶり涙の再会だったはずなのに、結局はいつものように静蘭に説教された。それでも3人は「ありがとう、嬉しい」とは言ってくれた事に漣も嬉しさを隠せなかった。

「あんな服着れないわよ！！」

「だから、罰なんだよ。間違えないなら問題ない」

「そうだけど…」

「それとも別がいい？」

漣の何気ない一言に秀麗は慌てて「その罰でいい！！」と断言すると、何度か「兄様、兄様」と呟き出した。

「そんなに嫌がらなくてもいいと思うけど」

漣は秀麗が嫌がる理由は分かる、高価過ぎて”破ってしまったら”・”壊してしまったら”と思うと、怖くて着れないのだ。そんなに気合を入れて着るような服ではない。紅家の正装でさえないのだ。漣の自作の品にしか過ぎないただの服なのだ。

夕食を終え後片付けを終えると、漣は自室へと戻った。

漣の自室は秀麗や父の室から遠く、静蘭の室からも遠く離れた場所にある。それは幼い頃から、何かを作り出すということをしていたためだった。漣自身そんな気はしないのだが何かを作り出している時、漣の室から聞きたくない音が漏れて苦情が出たそうだ。そのため自室と別室を離れた場所へ移動したのだ。別室という名の作業場には細々とした物が多く、散らかり、足の踏み場もないほど物で溢れている。それに比べると、自室には最低限なものしかなかった。寝台と箆笥が2つ、机と椅子しかない。あくまで自室は寝るための室として利用している漣なのだった。

室に入ると、漣れいしや紗が用意した男物の服が届いてあった。「親愛なるお館様へ、あなたの漣紗より」と香り付きの文があり、その横には胸を隠すには丁度よいサラシと上衣があった。上衣には二重に布が縫い合わされ胸の膨らみを隠すことができる品物。これは漣のために双狼党の女性たちが知恵を絞って作り上げたもの。今では双狼党の品物の一つとして他国へ売り出していた。売れ筋は良好で増産を検討している最中だったりする。そんなことを思い出しながら「よく父上にバレずに運べたね」と苦笑を浮かべた。

先代国王陛下の懐刀と呼ばれた父、”黒狼”。その領域である我が家へ潜入した彼。流石としか言えなかった。

「やっぱり、こういうのは彼に頼むのが一番だ」

漣は持って帰ってきた書簡を読んでいた。

「思った以上に曲者揃いの朝廷だね。優秀だが、癖がある。癖があるが、才能がない。…まだ双狼党うちの連中の方が、やる気もやり手もあるな…性格は問題有りだけど。………もう少し文官に入れるか…国試を受けさせよう」

書簡の内容は簡単なものだった。

今現在朝廷に派閥がある。大きく分けて国試派と貴族派。後は彩七家は、藍家以外の者がいる。それ以外で目立って気を引くようなものはなかった。

当面は羽林軍で動くことになる。そちらを重点的に必要大で情報収集し且つ、組織状態を確認し、これから先どれだけ役に立つてくれるか検討しなければならない。少しでも見落してしまえば、これから先に響いてくる。慎重に且つ油断なくやらなければならない。

漣はこれから先のことを踏まえて返事用の文に一つ一つ指示を出していた。

「指示出さなくても、史琉達しりゅうならもう布石を引いているかもしれないなあ…。各州から誰か寄越してもらって、こっちから誰か送って少し調整しよう。それと夏に向けて男用の服と酒。夏バテ回復の薬、お菓子を送ってもらって……」

数日後、漣を改め紅真清しんせいとして静蘭と共に羽林軍へ配属となり、秀麗は後宮へと向かう。そこで切ては切れぬ縁が出来る事をまだ知らない漣だった。

12 準備万端？ おまけ（前書き）

長い間、お待たせしました。
短いですが、楽しんでください。

12 準備万端？ おまけ

夜も更け、屋敷全体が静寂に包まれた頃、漣の室の扉を叩く音が響いた。

珍しく家の誰かが訪れたらしいく漣は先程まで読んでいた書簡を片付けると扉を開いた。そこには邵可が父茶を持って立っていた。

「少しいいかい？」

一応疑問形だが、拒否を許さないような雰囲気を崩さない邵可に漣は快く了承した。

漣は背中に嫌な汗をかきながら父を見つめていた。視線の先は邵可が持つ茶器。漣は帰ってきてから一度も父茶を口にしていない。邵可は何度も父茶を出そうとしたが、秀麗と静蘭の連携で遮つてきたのだが、今は救ってくれる人はいない。

邵可は寝台に腰掛けると父茶を渡した。

「ありがとう」

漣はなるだけ表情を崩さず受け取ると、一口飲んだ。ピシッと固まった漣を無視して、邵可は話し出した。

「少しは相談してもよかったんじゃないのかい？」

邵可は漣の沈黙に反省していると思い続けた。

「そりゃー霄太師を連れ帰って、まさかあんな話が出るとは思わなかったが、それにしてもよりによって羽林軍へ入らなくてもいいだろう。秀麗は貴妃として後宮へ行く。漣だって貴妃として後宮へ上がることだって出来た。貴妃は…少し難がある（……）なら女官として秀麗に付いていくことだって出来た。なのに…静蘭と一緒に羽林軍。羽林軍がどんな所か知っているのかい？両將軍はケンカバ…じゃなかった…武人としては一流だ。男と偽って行つたとしても武人の目は誤魔化せないだろう。遅くないから考え直さない。どうしても女官が嫌だというなら、文官の姿をして府庫に居なさい。まだ私の目の届く場所に居た方が手助け出来るから…」

邵可は漣の反応を無視して、これまで溜まっていた愚痴を散々言い出した。当の本人である漣は父茶の余韻から開放されず、固まっ
たまま永遠に続く父の話と言う名の説教を聞かされ続けた。
「いいかい、時間はまだあるからもう一度しっかり考えなさい。い
つでも断ることは出来るからね」

開放されたのは、夜明けまであと少しといった時刻だった。

〓 余談 〓

邵可が部屋を出ていってから漣が正気に戻ったのは、いつまでも
起きてこない姉を心配した秀麗の手によってからだった。

「おはよう、ねえ……じゃなくて……兄様。起きてる？」

「……………」

「兄様？」

秀麗が中に入ると、そこには湯のみを持ったまま立っている漣の
姿だった。

「兄様、大丈夫？何があったの？」

「しゅう……れい……？」

まだ覚醒しきれない漣は数回瞬きすると、ついさっきの事を
思い出していた。

「何で秀麗がいるの？もしかして眠れないの？」

「何言ってるの。もう朝よ」

秀麗の言葉で辺が明るくなっている事に気付いた漣は、手に持っ
ている湯のみを見た。

「夜更しでもしたの？また何か作っていたの？作るのはいいいけどち
ゃんと寝ないと次の日に障るわ。今日は寝てる？」

だんだん思い出してきた漣は、父茶のおかげで意識を飛ばしてい
た事に思い立った。

「寝ては……いたと思うけど……」

実際は意識を飛ばして、今起きた状態なのだが、意識が無いのな

らば寝ている状態と何ら変わりないと思った漣は、気を取り直して秀麗に極上の笑を見せ「大丈夫。身体は（漢方入りの父茶のおかげで）元気だから」と返すと、秀麗を促して部屋を出ていった。

やっぱりまだ父には敵わないと実感した漣であった。

武官として特別配属される漣…を改め真清が心配な3人の説得は留まることを知らなかった。「今からでも遅くないから女官として秀麗に付いて行くべきだ」と邵可は散々言ってきたが頑として聞き入れることはなかったし、「一緒に貴妃として上がりましょう？それとも女官がいい？あたし一緒に居たい」と秀麗は潤んだ瞳で見つめ思わず「貴妃としていこう」と返事しそうになったりした。特に静蘭は「これ以上面倒をかけないで下さい」とか「自分の弱点を忘れているんですか」とか「即刻、バレて強制的に帰っていたかどうかありませんね（黒い笑）」などと、今までの復讐だと言わんばかりにネチネチ言われたが、真清は一切無視して準備を怠ることなく過ごしていた。

あと数日で後宮へ上がると言う日に来客が訪れた。

真清は一人なのを良いことに必要な物を居間へ運び入れていた。情報という情報を入れ、もしものための暗器を念入りに服に仕込み、各系統への連絡網を確認をし他に忘れていないか確認している時に限ってやってくるのが、一番厄介な人物だった。

「こんにちは、お館様」

薄紅色の服を着て、黒髪を高く結い上げ垂らした髪全てを三つ編みにして背中へ垂らし留め紐の代わりに派手な布で一つ一つ丁寧に結んでいた。薄く化粧を施した顔は良いところ出の小娘に見えた。

「糸們」

「違います。玲羅です。忘れたんですか」

につこりと微笑みながら真清の側まで近付いてくると、玲羅は居間に入り込むと真清が暗器を仕込んだ服に更に持ってきた暗器を仕込んでいった。玲羅が持ってきた暗器は猛毒が付いた針、神経毒を

仕込んだ指輪、服の内側に仕込んだ極細の糸と身体の一部を一時的に麻痺する毒など、どう見ても過剰な暗器が仕込まれているのに、真清は総無視して気付かなかった。

一通り仕込みや覚えることを終わると、真清は一度台所へと向かい2人分のお茶とお菓子を持ってきた。

2人して一息付くと玲羅は立ち上がると、真清と向き合うと宣言した。

「アタシも後宮へ上がることにしました!!」

絶句の真清を無視して玲羅は続けた。もちろんその顔にはしてやったりと確信犯的な笑を浮かべていた。

「絶対、付いていきますからね」

半ば諦めかけた真清は面倒臭そうに呟いた。

「それは心配から?」

「違いますよ。楽しそうだからです」

「後宮へは行かないよ」

「構いませんよ。どうせ羽林軍なんて暇でしょうから。それに繋がりを作るなら一人くらい後宮に居た方がいいでしょ?」

「……まあ、そうだけ……ねえ……」

「アタシならどこでもまぎれること出来ますし、役に立ちますよ。いざとなったら傍へ行くことも、情報を掴むことも、伝手を作ることも、手引きすること、騒動やおとりとなることも、暗殺することも出来ますし」

「誰を暗殺するつもり?」

「もちろん、お館様に色目を使う奴、口説こうとする奴、押し倒そうとする奴、全てが対象です」

自信満々に答える玲羅に真清はため息を吐くしかなかった。

「……男」として行くんだから色目や口説く奴なんて居ないだろうに……」

「何言ってるんですか!!世の男の中には雑食がいるんです!!女性が無理で男性なら”むしろ良い”っていうどうしようのないダメ

男がいるんです！！それに女性も男性も両方”良い”っていう下種な男もいるんです！！」

「…今回はそこまでしなくてもいいような気がするんだけど…」

「ダメですよ。こんな機会なかなか無いんですから、思いっきり利用するべきです。それにこれはアタシにしか出来ないことですし。」

特に奴等……狂犬とか、番犬とか、忠犬とか、猛犬とか、駄犬とか

…絶対に出来ないことですから！！アタシだけで心配なら縹紗と葵蝶も付けましょうか？あの2人なら喜んで付いてきますよ。姚葩楼がどうなろうと江蛾が全責任負えばいいだけです。むしろ全責任負え？みたいな…」

うふふふと黒い笑を浮かべ腹黒い計画を口に行っている玲羅をどう止めるべきか真清は悩むが、止める要因が思い付かず出た言葉がやっぱりアイツしかなかった。

「そうなると、守銭奴が怒り心頭でやって来きて、吊るし上げの刑にし馬車のごとく働かせ、通常の倍がめつく稼がせるだろうね。徹夜なんて当たり前で」

「たかがお金大好き、儲け大好き、働くの大好き、節約、儉約当たり前な守銭奴が暴走して突進しても問題ありませんよ。返り討ちにしてみせます。何なら守銭奴防衛隊でも結成して事にあたりましょう。守銭奴に恨みがあるのはアタシだけじゃないし、むしろ他大勢いますし。皆で事に当たれば………」

「誰が守銭奴を止めると思ってるんだ」

「お館様以外いないでしょ」

簡単に断言する玲羅に真清はガツクリと頭を下げた。

「もうちよつと…考えて物事言えない」

真清の切実な物の言いに玲羅はこれまたはつきりと断言した。

「無理です。本能と欲望、ちよつぴりの理性に忠実なのがアタシなんです。もちろん、お館様には忠犬の如く従いますよ」

玲羅の暴走と守銭奴の暴走はどちらの方がマシか思案する真清は、残りのお茶とお菓子を食べて一息付いていた。

これから起こることの不安が倍增したのは言うまでもなかった。

後宮へ上がる朝、正装した秀麗に「可愛い」を連呼した真清の姿に3人は絶句していた。

顔は相変わらず”漣”の時と何ら変わりが無いはずなのに、どうみても”漣”の面影を見つけることはできなかった。最初から”紅真清”として生きてきたかの様な風貌に驚きを隠せなかった。

ここ数日の真清の姿より幾分武官らしい立ち姿、隙のない仕草、身なりをすつきりさっぱりしたせい、資格好はどこから見ても”男性”で”女性”であることが嘘のような姿だった。長い髪はきつちり一つに結ばれ激しい動きに邪魔にならないようになっていた。華奢な身体は何一つ変わっていないが、女性である胸の膨らみを隠していた。

「兄様、胸はどうしたの？」

秀麗の視線は真清の胸に釘付けになっていた。秀麗よりはあった胸の膨らみがきれいに無くなっていったのだ。3人の視線は一気に真清の胸へと注目した。

「これは特別仕様の上衣だからね。何枚もの絹を重ねて膨らみを隠しているんだ。もちろん、身体にはサラシを巻いてある程度は、平坦な胸板を作っているけどね」

必要以上に念入りに準備したと分かる服装に真清のヤル気が伺えた。そしてどこを見てもため息が出るほどの手の込ように3人はもう何も言えなかった。

次に目に付くのは腰に提げた細い剣。その剣は国支流の両刃の物とは違い、片刃の品物。刀身の長さは1寸8尺（約70cmくらい）の鋼が光沢を帯び輝いて鋭さを物語り、柄の部分には、赤い紐と赤丹色（明るい赤色）の紐の2色が模様を描くように縛り付けられており、鐔は丸型だが隅に小さな桜と桃の花びらが型抜いてあり、鞘は、黒光りする木の筒。表面には菱形が細かく彫られていた。

どこを見ても職人魂の込められた品に言葉をなくした。

珍しさに邵可は手に取りしげしげと眺めていると、真清は簡単に説明した。

「これは遙か東の島国の伝統の物らしいよ。カタナと言って、刃は片方だけで背には鋭さがないでしょ。無理して斬る必要が無いものに対して威嚇出来るし長さ的にも丁度いいし、細いから使いやすいよ。貰い物でいつか自分で造りたいんだけど、造り方教えてくれないんだよねえ」

実に得意げに説明する真清に、それ以上詳しく聞くことはできなかった。この5年間を少しだけ垣間見ることが出来るかと思ったが、必要以上に言わない真清だった。

「これは置いていく方が無難だろう」

邵可の一言に真清は難色を示したが、邵可の「悪目立ちするし、これを持っていくつもりなら羽林軍へ上がることは認めない」と言い出した。邵可の細い目が僅かに開き真清を見つめた。物言わぬ目に真清は、渋りながらも置いていくことにした。内心、僅かに開いた父の様子が怖いと感じてしまったのだ。

真清を複雑そうな顔で見る秀麗と静蘭に対して秀麗付きの筆頭女官として来ていた珠翠しゅすいは何とも言えない表情で聞き流していた。目の前の男装している麗人が噂の”紅家の長姫”であるとは夢にも思わないだろう。それほど女であるとは思えない容姿だった。

自分たちとどう接するのか距離を考えている風に見えた珠翠に対し真清は、何かを思いつたように微笑みながら珠翠に近付いた。

「はじめまして珠翠様。紅こう 真清しんせいと申します」

珠翠の左手を取り甲に軽く口付けした。意表をついた真清の行動に珠翠は目を丸くした。今までこのような行動をした男性は……いなかったのだ。

真清は一度顔を上げた。顔を上げた真清を近くで見た珠翠は、邵可に似ていることに気付いた。邵可とは違い瞼は開かれているが、瞳の色や意志の強さや肌の色や輪郭など、どことなしか似ていた。

自分より僅かに高い視線の先にいる人物が思い出の中の人たちと重なることに気付いた。

言葉をなくして真清を見つめる珠翠の耳には、真清の言葉があまり入ってこなかった。

「秀麗をよろしくお願いします」

視界から消えた真清を探すため視線を下げると、そこには頭を下げた真清がいた。珠翠は慌てて「頭をお上げ下さい。真清様」と、「真清で結構です、珠翠様」と優雅に微笑んで佇まいを変えた。

お互い正面から視線を交わすと笑顔で向き合った。

「私の事は珠翠で結構ですわ。それに敬語も結構ですよ」
わたくし

「そうはいきません。ただの羽林軍の武官と後宮の筆頭女官長とでは、位は違います！是非、真清とお呼びください」

珠翠は困ったように邵可に視線を送るが、邵可はまだ刀を手にし眺めていた。秀麗と静蘭を見ると、そこは2人で何か楽しそうに会話をしていた。つまりこの状況を助けてくれる人は皆無ということだった。

「珠翠様、どうかなさいましたか？」

真清の変わり様に誰一人気付くことなく、珠翠はこの状況を打開しようと思いを巡らす。が打開出来る術はなく途方にくれた。

くすくすと笑う真清の姿に珠翠は、先程の真清の微笑みを思い出した。

「もしかして、からかいましたか？」

「はい。楽しかったです」

噂の人は珠翠が思っていたよりも遥かに違っていた。秀麗と同じように毎日賃金仕事と家事に追われ官吏になることを夢見ていた少女と同じような娘だと思っていた。

少なくとも、人をからかいながら困った状況を意図的に作り出すような人物ではないと思っていた。

「警戒しなくてもいいですよ。これから長く付き合うことになりそうですね、珠翠」

してやつたりと笑顔を見せる真清に珠翠は言葉をなくした。

「お近付きの印にこれをどうぞ！」

真清が差し出したのは玉が連なれた腕輪だった。玉は水晶と真珠と瑪瑙と月長石を交互に配置したものだった。

「きれい」

「父から話は聞いていたと思いますが、僕はこういう物を作るのが結構得意なんですよ。特に大切に思う方のみ手作りで身に付けれるものを差し上げてるんです」

何気ない笑顔と大切に思われていると錯覚しそうな言葉に珠翠が真清に落ちた瞬間でもあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1572q/>

彩雲国～最強という名の最凶な姉姫～

2011年12月13日21時27分発行